

Get The Real.....

英語

参考書
改訂版

VSOP英語研究所 所長
西卷尚樹

English is **V**ery **S**imple **O**ne **P**attern.

英語参考書改訂版

VSOP英文法の決定版！

VSOP
英語研究所 所長

西卷尚樹

Get The Real.....

英語

參考書
改訂版

VSOP英語研究所 所長
西卷尚樹

VSOP

English Laboratory

5-11-35 Roppongi Minato-ward, Tokyo Japan
VSOP English Laboratory is a department of VSOP Operational Headquarters.
It furthers the Operation's objective of excellence in research, scholarship,
and education by publishing worldwide
in Minato-ward, Tokyo
VSOP English Grammar & SVOP are registered trademarks
of VSOP English Laboratory
in Japan

Copyright © VSOP English Laboratory 2015
The moral rights of the authors and artists have been asserted
Database right VSOP English Laboratory (maker)
First published 2008

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced,
stored in a retrievable system, or transmitted, in any form or by any means,
without the prior permission in writing from VSOP English Laboratory.

Within Japan, exceptions are allowed in respect of any fair
dealing for the purpose of research or private study, or criticism or
review, as permitted under the Copyright Law No.48, May 1970,
or in the case of reprographic reproduction in accordance with
the terms of the licenses issued by the Japan Patent Office.

Enquiries concerning reproduction outside these terms and in other
countries should be sent to the Rights Department, VSOP English Laboratory,
at the address above.

This book is sold subject to the condition that it shall not, by way of trade or
otherwise, be lent, re-sold, hired out or otherwise circulated without the
publisher's prior consent in any form of binding or cover other than that in
which it is published and without a similar condition including this condition
being imposed on the subsequent purchaser.

Designed and typeset by VSOP English Laboratory
Printed in Tokyo.



英語は、「言葉の働き」を語順で決めている言葉です。
 ということは、その語順の規則が分かれば英語が理解でき、使えるようになるということです。

VSOP 英文法は、長年の研究の結果、その語順がワンパターンだということ突き止めたものです。

そのワンパターンの語順というのは、SVOP という形で表せます。この SVOP の内容は以下の通りです。

【英語の基本文の語順】

英語は、始めに「主語 (S)」を言ってその後ろで、「話し手の判断 (V)」を言います。そして、その後ろに「何に対する判断かという情報：判断の対象 (O)」を言います。最後に、この SVO に対して、「それが何だ」という「叙述 (P)」を言います。

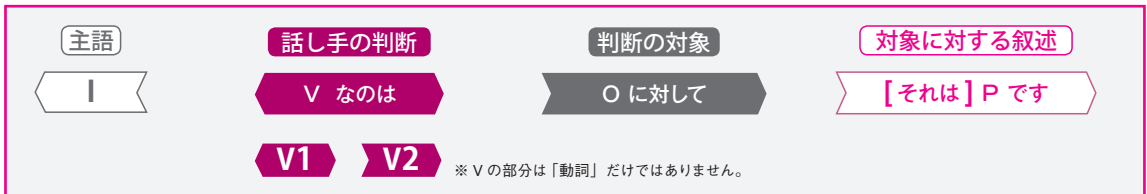
このように、先に「話し手の判断」を言い、その「内容」の後で言うのは、英語やドイツ語、オランダ語などの「ゲルマン語系」の共通のロジックです。

英語は、この S-V-O-P という「4つの言葉の要素＝文節」を順番に並べて「文の意味」を作っています。

ですから、これらの言葉の使い方が分かれば、簡単に英文が分かり、自由に使えるようになるのです。

ただ、このように頭を切り換えることは、多くの日本人にとって大変なことだと思います。それは、一つには、日本人は「話し手の判断を最後に言う日本語」を使っているからです。先に「話し手の判断」を言うのになかなかなじみません。もう一つは、「英語は『主語＋動詞＋目的語＋修飾語』のように「主語のすぐ後ろの言葉を『動詞だ』』と思っているからです。けれども、「動詞」というような「一つの品詞」だけで「話し手の判断」を表しきれないわけはありません。

本書は、VSOP 英文法の「基本書」です。ですから、主語のすぐ後ろの言葉は「話し手の判断」とか「気持ち」を言っているのであって、「動詞という品詞ではない」と理解すると、「英語がワンパターンで、簡単に分かるようになる」ということを中心に説明します。



Contents ①

本書は、VSOP メソッド入門のための「基本編」です。基本的な言葉の組み合わせ方を説明しています。

	「話し手の判断」とは	今までの解釈とその問題点
Chapter 0 >P009	「私は飛行機で旅行するのが好きだ」の類義表現 I like traveling on a plane. I am fond of traveling on a plane. I am in love with traveling on a plane. I have a liking for traveling on a plane.	動詞の後ろの品詞で文の種類を分ける 第3文型：S + V + O 第2文型：S + V + C + M 第1文型：S + V + M 第3文型：S + V + O
VSOP 英文法とは	英語は、主語の後ろで「話し手の判断」を表しており、いろいろな品詞の言葉で同じような判断を表せるので「類義表現」がたくさんある。これは「主語の後ろの言葉」が「同じ働き」をしているからである。主語の後ろを「話し手の判断」と考えると、英語は「4つの要素」で文を形作っていることになる。この4つの要素をS-V-O-Pと呼ぶ。主語(S) 判断語(V) 対象語(O) 叙述語(P) この語順を体得すると英文は語順通りに理解できるようになる。Sが-Vなる/であるのは-Oに対してで-[それは] Pです。判断語のVは、Verdict	動詞を中心に五つの文型に分類 (五文型英文法)。 第1文型：S + V + M 第2文型：S + V + C + M 第3文型：S + V + O + M 第4文型：S + V + O + O 第5文型：S + V + O + C Sは主語、Vは動詞、Cは補語、Oは目的語、Mは修飾語である。
Chapter 1 >P015	英語の基本は do・be・have を使った判断語 「私はそのアメリカでのツアーについて知っている」 ① I [do] know of the tour in the USA. ② I am aware of the tour in the USA. ③ I have some info about the tour in the USA.	動詞だけが述語の働きをする know：第3文型：S + V + O know は他動詞である。 be aware：第2文型：S + V + C be が動詞で aware が形容詞で補語。 have some info：第3文型：S + V + O have が他動詞で some info は目的語
判断語とは	[do] 動詞・be □□・have 名詞は、「2語組んで」話し手の判断を表す。do・be・have は「判断詞 (V1)」で、疑問文とその応答、否定文、省略、強調倒置などの「文の操作」で同じように使う。日本語の述語は「何が、どうする(動詞)」「何が、どんなだ(形容[動]詞)」「何が、何だ(名詞)」「何が、ある/いる」と4通りある。英語も同じで、動詞だけで「話し手の判断」を表すだけでなく、「いろいろな言葉」が使えないと言葉は話せない。be や have は do と同様、ロジックを司る言葉で、後ろの言葉を判断語にする「補助的な働き」をしている。	do・be・have の各々は「本動詞」と「助動詞」の使い方が異なる。 be は「自動詞」で、後ろに補語を伴う場合は「不完全自動詞」で、補語を伴わない時は「完全自動詞」である。 have は他動詞だが、have 目的語は、目的語を主語に受動態が作れないので、have は他動詞ではない。一般動詞の文を疑問文や否定文にするときは、do を使う。
Chapter 2 >P029	be □□：□□を「話し手の判断」にする I am happy with you on this tour. I am a tourist from Japan. I am in the mood for a trip somewhere. I am up for a trip anytime.	be の働きは 3種類ある be 動詞+形容詞：第2文型：S + V + C be 動詞+名詞：第2文型：S + V + C be 動詞+前置詞句：第1文型：S + V + M be 動詞+副詞：第1文型：S + V + M
be を使った判断語	be の後ろの言葉は「話し手の判断」にする一つの働き(判断詞) be の後ろで名詞・形容詞・副詞・前置詞句のどれを使っても同じ働き。a/an/the は「話し手の判断」を表す重要な言葉。	be の後ろの言葉が「名詞・形容詞なら be + 補語」、「副詞・前置詞句」なら「be + 修飾語」。「be の後ろの言葉の品詞によって be の働きが違う。さらに、助動詞の使い方もあり、3種類に分かれる。
Chapter 3 >P041	get □□は判断語：補助的な自動詞の使い方 I get busy with work around ten. I get out for lunch at twelve. I get in contact with customers in the afternoon. I got a chance for a trip to the USA.	get(動詞)の後ろの品詞で区別する 動詞+形容詞(補語) 動詞+副詞(句動詞) 動詞+前置詞句(熟語：イディオム) 動詞+名詞(目的語)
基本動詞：get を使った判断語	基本動詞は、「自動詞の使い方」と「他動詞の使い方」の両方で使う。また、内容により「具体的な行為を表す場合」と「補助的な働きをする場合」がある。2×2＝合計4通りの使い方がある。使い分けの基準は「後ろの言葉が、具体的に抽象的か」によって異なる。自動詞・他動詞は、動詞固有の性質ではなく、基本動詞で片方の使い方しかない言葉は、非常に少ない。「自動詞・他動詞の区別が重要だ」と覚えると、基本動詞は使えなくなる。	今までの解釈では「動詞の後ろの言葉の品詞」によって言葉の働きを区別する。動詞の後ろが「形容詞なら補語」、「副詞なら動詞を修飾して句動詞」、「前置詞句なら副詞用法」。また、「動詞の直後の名詞は目的語」で、「get 名詞」の get は「他動詞」である。 問題点：すべてバラバラな呼び名になり、イディオムや慣用表現なので一つ一つ覚える。

	基本動詞は組み合わせて使う	今までの解釈とその問題点
<p>Chapter 4 >P053</p>	<p>S V1 V2 O P</p> <p>I [do] walk to the office everyday. I will walk [for] ten minutes to the museum. I [did] walked for a day around the town.</p>	<p>will と be going to do は「未来形」である。過去形は「過去の実事」を表す。</p>
<p>未来と過去 話し手の 判断の拡がり</p>	<p>動詞の現在形は「動作や行為」を表しておらず「今の状態」を表している。will は「発話の時点での話し手の主観的な判断」を表す。過去形が不規則に変化する動詞は「補助的な働きをする動詞」である。will は「未来の意味」以外にもたくさんの使い方があり、英語の時制は「現在と過去」しかない。</p>	<p>will は未来を表す助動詞で、be going to do は同じ意味をあらわすので、助動詞相当語である。これらの言葉が使われている文は未来形の文である。動詞は、過去形を規則的に作る「規則動詞」と、不規則に作る「不規則動詞」がある。</p>
<p>Chapter 5 >P059</p>	<p>自動詞の使い方：be □□ ⇒ 動詞+□□</p> <p>I [did] got a raise to 100,000 yen a month. I [did] got ready for a trip to the USA. I [did] got ahead of others in terms of sales. I will get in shape for a long trip in the summer.</p>	<p>動詞の後ろの品詞によって細かく分類</p> <p>□□の品詞によって名前が変わる</p> <p>動詞+名詞 ⇒ 目的語 動詞+形容詞 ⇒ 主格補語 動詞+副詞 ⇒ 修飾語 動詞+前置詞句 ⇒ 修飾語</p>
<p>自分のことを表す 「具体的な行為」と 「補助的な判断」</p>	<p>「be □□」は「静止した状態」を表し、これをもとに「動詞 □□」で「変化や様子・気持ち」などの「補助的な判断」を付け足す。□□が「判断の内容」になっている。このような使い方をしている動詞は「自動詞の使い方」である。□□で使う言葉は「名詞・形容詞・副詞・前置詞句」などで、動詞との組み合わせ方に「意味の制限」はあるが「品詞の制限」はない。「動詞+□□」という「2語組み合わせ」で「話し手の判断」を表すのは、英語の基本ロジックで組み合わせは無限にある。</p>	<p>一般動詞の後ろが「名詞」の場合は「目的語」か「主格補語」で、「形容詞」の場合は「主格補語」になっている。後ろの言葉が「目的語」の場合は「完全他動詞」で、「主格補語」になっている場合は「不完全自動詞」である。一般動詞の後ろの言葉が「副詞か前置詞句」の場合は「修飾語」として使われている。この場合の一般動詞は「完全自動詞」で「状態の変化」を表す。熟語（イディオム）である。問題点：「品詞による分類」なので、「各々の言葉の品詞」が分からないと、その働きも分からない。</p>
<p>Chapter 6 >p069</p>	<p>S V1 [Mid] V2 O P：「補助的な判断」は 中位 (Mid) で使う Middle Position</p> <p>I am always busy on the phone in the morning. I [do] always get a lot of phone calls in the morning.</p>	<p>always(いつも)のような「頻度の副詞」や greatly(非常に)のような「程度の副詞」は、「一般動詞の前、be動詞の後ろ」で使う。</p>
<p>「補助的な判断」</p>	<p>always(いつも)のような「補助的な判断」を表す言葉は、2つの判断語 [V1 + V2] の間で使い S-V1 [Mid] V2 の形になる。この位置から「後ろの判断内容語 (V2)」を補助的に説明する。「語順で意味を決めている」ので、中位 (Mid) で使う言葉にも、判断内容語 (V2) で使う言葉にも「品詞の制限」はない。</p>	<p>中位 (Mid) で使う言葉は「副詞」で「動詞を修飾する」。問題点：実際の英文では、中位 (Mid) で使う言葉に、品詞の制限が無く、それが修飾する後ろの言葉にも品詞の制限が無い。「中位の副詞」という言葉にこだわると「言葉の関係」が分からなくなる。</p>
<p>Chapter 7 >p075</p>	<p>他動詞の使い方は、目的語を主語とした複文 S + 動詞+目的語+ [V1] + □□</p> <p>I [did] got a camera at a discount shop. I [did] got a camera for the trip to the USA. I [did] got the camera out of my bag. I [did] got the camera ready for the shot. I [do] have the camera in good condition.</p>	<p>動詞+□□と同じように、O- □□の部分にもバラバラな名前が付く</p> <p>⇒ 場所を表す副詞句 ⇒ 目的を表す副詞句 ⇒ 場所を表す副詞句 ⇒ 目的格補語 ⇒ 状態を表す副詞句 動詞+名詞 (目的語)</p>
<p>他動詞の使い方① get から いろいろな動詞へ</p>	<p>「他動詞の使い方」は「動詞+目的語+□□」のようになっている。このような使い方をしている場合、目的語の後ろの言葉により「基本動詞」はいろいろな意味になる。それは「動詞が補助的な働き」で、「目的語の後ろの□□ (叙述語・P)」が動詞の意味を決める重要な情報になっているからである。目的語+□□のつながり方はいろいろな関係があるが、基本は「□□が目的語の説明」をしており、「目的語+□□」は「1つの文になっている」。その際、目的語+[V1]+□□のV1の部分に、do-be-haveの基本ロジックが隠れて使われている。目的語は「対象語の一つの形式」であるが、後ろの□□に対しては主語になる。</p>	<p>動詞によって「自動詞・他動詞の区別」がある。他動詞は目的語を伴い、目的語の後ろにある言葉、品詞によってその果たしている働きは違う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・形容詞の場合は目的格補語である。 ・副詞や前置詞句 (副詞句) の場合は動詞を修飾している「副詞 [句]」である。 <p>問題点：品詞で分類するのでバラバラな呼称になる。英文の意味を理解するのに「個々の単語、フレーズ」の「意味」だけでなく、「品詞」も覚えていなくてはならない。</p>

	自動詞・他動詞は使い方の違い	今までの解釈とその問題点
<p>Chapter 8 >P083</p>	<p>他動詞の使い方は、目的語を主語とした複文 S + 動詞 + 目的語 + [v1] + □□ : ネクサス I will make my son [have] a pizza. I will make my son [be] a photographer. I will make my son [be] ready for the trip. I will make my son [be] up for the trip. I will make my son [be] in the mood for a trip. I will make my son [do] take a lot of shots.</p>	<p>動詞 + □□ と同じように、 O- □□ の部分に別々の名前が付く ⇒ 直接目的語 ⇒ 目的格補語 ⇒ 目的格補語 ⇒ 修飾語 ⇒ 修飾語 ⇒ 目的格補語</p>
<p>補助的な 他動詞の使い方</p>	<p>他動詞の使い方は「動詞 + 目的語 + □□」のようにになっている。このような使い方では「動詞は補助的な働き」をしている。 目的語 + □□ の言葉のつながり方はいろいろな関係があるが、基本は「□□が目的語の説明」をしており、「目的語 + □□」は「1つの文になっている」。 その際、「目的語 + [V1] + □□」の V1 の部分に、do・be・have の基本ロジックが隠れて使われている。 目的語は「対象語の一つの形式」であるが、後ろの□□に対しては主語の働きをする。 補助的な他動詞の使い方では「O-P で一つの文を作る」ので、このロジックを身に付けていないとこれらの表現がよく理解できない。 give(与える) や make(作ってあげる) のような「2つの目的語」を使う言葉は、O-[have]-P のロジックで結び付いている。これらの言い換え表現は、have のロジックから be のロジックに換わる。 give 人 [have] 物 ⇒ give 物 [be] to 人 make 人 [have] 物 ⇒ make 物 [be] for 人</p>	<p>他動詞の目的語の後ろにある言葉は「品詞によって働きが違う」と考えられている。 ■目的語の後ろが名詞の場合 ・名詞=目的語と考えられる場合は「目的格補語」 第5文型: S + V + O + C ・名詞≠目的語と考えられる場合は「直接目的語」 第4文型: S + V + O + O 前のOは「間接目的語」。後ろのOは「直接目的語」になる。 ■目的語の後ろが名詞以外の場合 ・形容詞の場合は目的格補語である。 第5文型: S + V + O + C ・副詞や前置詞句(副詞句)の場合は動詞を修飾している「副詞[句]」。 第3文型: S + V + O + M ・原形動詞の場合は目的格補語。 第5文型: S + V + O + C ■give や make のような「二重目的語」を取る動詞が、直接目的語が前に移動して、間接目的語が後ろになる場合は「第3文型: S + V + O + M」になる。</p>
<p>Chapter 9 >P097</p>	<p>S is □□ : 活用した動詞を使う We were talking about the rumor during lunch. We were asked about the issue by the manager. We are to talk about the policy for this month. I am the talk of this company.</p>	<p>□□ の語形により呼び分ける ⇒ 進行形 ⇒ 受動態 ⇒ be to の構文 ⇒ 主格補語 ※ the do は「動詞の活用形」と考えられていない</p>
<p>動詞の4つの活用形 の意味と 使い方 be + 活用形</p>	<p>動詞の活用形は4つある: to do, doing, done / -ed, a do 活用した動詞は、be と結び付いたり、have と結び付いて「基本的な話し手の判断」を表す。この場合は「事実」を表す。 ・ to do は「これから必ず～することになっている」 ・ doing は「ある動作・状態が、『始まって→しばらく続いて→そのうち終わる→繰り返す』という意味から4通りの使い方がある。 ・ done / -ed は「～し終わった状態になっている(受け身)」を表す。 ・ a do の語形も重要な動詞の活用形である。「動作や行為を、一つのまとまった事柄(名詞)」を表しているいろいろな使い方をする。これらの「活用した動詞」は、□□と同じように「働きを変えて」文中のどこでも同じ意味で使う。 この章では、be doing, be to do, be done / -ed, be a do の使い方を説明する。</p>	<p>動詞の活用形は、doing, done / -ed 2つあり、to do は「to が付いた原形動詞」で、「to-不定詞」と呼ぶ。 ・ be doing は進行形で、時制の一つである。 ・ be done / -ed は「受動態」で「他動詞の能動態」から作られている。受動態にできない動詞は他動詞ではない。これらの使い方をしている場合 be 動詞は助動詞である。 ・ be to do と be 動詞の後ろに to- 不定詞を使う場合は補語になっており「名詞的用法の to-不定詞」である。この場合の be 動詞は本動詞である。このような説明は煩雑なので「be to do の構文」と呼ぶ。 ・ a do の形は「行為動詞の名詞化」で、名詞と同等の価値を持つものである。 問題点: 「状態を表す動詞は進行形にしない」となっているが、普通に使われている。 ・ be to do と be a do の説明が十分になされていない。</p>

	動詞の活用形の使い方	今までの解釈とその問題点
Chapter 10 >P111	<p>S has □□</p> <p>I have heard of the tour from the agent. I have to join the tour in the USA. I had a talk with the agent about the plan.</p>	<p>□□の動詞の活用形の違いによって呼び分ける</p> <p>⇒完了形(完了・結果・経験・継続) ⇒助動詞相当語(mustの言い換え表現) ⇒動作名詞の目的語=熟語(イディオム)</p>
動詞の活用形 have+活用形	<p>「haveと動詞の活用形」が結び付いた「2語表現」は3通りある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・have done/-edは、have(持っている=～がある)とdone/-edの「～し終わった状態」を組み合わせて、「～し終わった状態を持っている」という「言葉の意味の通り」の内容を表している。「文の他の要素=補助的な判断や叙述語(P)」によって「完了・結果・経験・継続」などのいろいろな意味を表す。 ・have to doもhave a doも、have done / -edと同じロジックで言葉を組み合わせている。 ・have a doは「一回～をする」という「行為」を表し、「動作の仕方の違い」により、get, make, takeなどの動詞を使い分ける。「一つの行為をする」は頻繁に使うので重要な表現である。 ・be done / -edが「完了」の意味なることもあるで注意。 ・have done / -edと[did] --edの違いがあることにより、[did] --ed(過去形)は「今は～でない」という含意がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・have done / -edは完了形と呼ばれ、時制の一種である。「完了・結果・経験・継続」の4つの用法があり、過去を表す副詞とは一緒に使えないので注意する。 ・have to doはmustとほぼ同じ意味を表す。この場合のhaveは他動詞でも助動詞でもない。全体で助動詞相当語である。 ・have a doはa doを目的語とする慣用表現で、熟語として覚えておくことで表現の幅が広がる。 <p>問題点: have done / -edの表現は「完了・結果・経験・継続」に分類しにくいものがたくさんある。 have a doは英語の基本ロジックなので十分に理解しておく必要があるにもかかわらず、熟語(イディオム)と呼んで「文法事項」として説明していない。</p>
Chapter 11 >P133	<p>S 動詞+動詞の活用形</p> <p>I [do] want to join the tour in the USA. I [did] began searching a suitcase for the trip. I [do] feel excited about my first visit to the USA. I will make a visit to New York with my family. I will go see a musical on Broadway.</p>	<p>「動詞の活用形」で用法を呼び分ける</p> <p>⇒他動詞の目的語の名詞的用法のto-不定詞 ⇒他動詞の目的語の動名詞 ⇒不完全自動詞に主格補語が付いた用法 ⇒他動詞+目的語=熟語(イディオム) ⇒go to see や go and see のtoやandの省略</p>
動詞+ 動詞の活用形	<p>「be +活用した動詞」を元に「動詞+活用した動詞」と2語組み合わせて使う。これは、be □□を元に「動詞+□□」で使うのと同じである。この場合、前の動詞は「補助的な判断」を表し、判断の内容は「後ろの活用した動詞」が表している。また、「動詞の活用形の前」には、動詞以外にも、be □□やhave +抽象名詞などのいろいろな形の言葉も使う。do・be・haveを基本ロジックとしているので「補助的な判断」を表す場合も品詞の制限が無いからである。 be □□やhave a doを元のロジックにして「補助的な判断」として使っているので、動詞の活用形の意味と合わない動詞は使えない。品詞で使い分けるのではなく「意味で使い分ける」のである。</p>	<p>to-不定詞の用法には、「名詞[的]用法・副詞[的]用法・形容詞[的]用法」の3用法がある。 to-不定詞が動詞の後ろで使われている場合は、「目的語の名詞的用法」。「be形容詞」の後ろで使われている場合は「形容詞を修飾する副詞用法」。「have a名詞」の後ろで使われている場合は「名詞を修飾している形容詞用法」である。 また、「名詞的用法のto-不定詞」と「目的語として使われている動名詞」はほぼ同じ意味を表す。 doingとdone / -edが動詞の後ろで使われているときは「主格補語」になる。 「動詞 a do」は熟語(イディオム)。</p>
Chapter 12 >P151	<p>S 動詞+目的語+□□(動詞の活用形)</p> <p>I [did] saw my son [be] preparing his luggage for the trip. I [do] want my son [be] to prepare his luggage by himself. I [do] make my son [do] prepare his luggage by himself. I will have his luggage [be] prepared by tomorrow. I will make my son have a great time in the USA.</p>	<p>□□の違いにより呼び分ける</p> <p>⇒現在分詞が目的格補語 ⇒説明できない使い方 (to不定詞は目的格補語とは言わない) ⇒原形不定詞が目的格補語(使役動詞) ⇒過去分詞が目的格補語 ⇒原形不定詞が目的格補語(使役動詞)</p>
他動詞の使い方② 活用した動詞	<p>補助的な他動詞の使い方では、動詞+目的語の後ろに、目的語を主語として、それを叙述する言葉を後ろで使う。 動詞+目的語+□□と同じように、「動詞+目的語+活用した動詞」の形も使う。O-[V1]-Pで一つの文を作るので、基本文で使われる表現は、O-[V1]-Pでも使われる。その際、do・be・have(判断詞(V1))が隠れて使われ、do・be・haveの後ろで使う言葉は、「全て目的語の後ろ」で使うことができる。 また、[do]+動詞やhave +抽象名詞のロジックを使って叙述することもできる。 この場合も、動詞の意味で「Pで使う言葉」を使い分ける。</p>	<p>「動詞+目的語」の後ろで使われる言葉の品詞によって「使い方を分類する」ようになっており、いろいろな文法用語で説明する。 doingとdone / -edと原形不定詞が使われる場合だけを「目的格補語[C]」とする。 特に原形不定詞が使われている場合を「使役動詞・感覚動詞」としているが、何故原形不定詞が使われるのか理由は説明しない。 また、目的語が「目的格補語の主語になっている」ことにはあまり言及していない。</p>

	他動詞の使い方と I think that は同じ	今までの解釈とその問題点
<p>Chapter 13 ① >P169</p>	<p>S V1 + V2 O P</p> <p>I [do] think [that] the trip will be fun for us. I am sure [that] the trip will be fun for us. I have a feeling that the trip will be fun for us. I am a believer that traveling can be fun for everyone. It is obvious that traveling will be fun for everyone.</p>	<p>V1 + V2 の品詞によって that 節を呼び分ける</p> <p>⇒ think の後ろは目的語の名詞節 ⇒ sure の後ろは修飾語の副詞節 ⇒ a feeling の後ろは同格の名詞節 ⇒ a believer の後ろの名詞節は「説明できない」 ⇒ It is □□の後ろは本主語の名詞節</p>
<p>判断を真っ先に言い O-P をきちんとした 文で言う</p>	<p>I think [that] svop. は「判断を真っ先に言って、その内容を後から言う」典型的な英語の発話である。 この場合の that は「接続詞」というような記号的な言葉ではなく、「それを」というきちんとした意味を表している。 また、このような判断を真っ先に言う言い方は、動詞だけでなく、be □□ [that] svop. や [have a 抽象的な名詞 [that]] などのさまざまな言い方がある。 また、このような言い方は、「S makes 人 [v1] □□」のような「他動詞の使い方」と、実は同じロジックになっている。 S-V と「話し手の判断」を言って、その後ろで「判断の内容を一つの文で言う」というのが「英語の発話法」の基本なのである。</p>	<p>that 節の that は「従属接続詞」で、that 節の前で使われている言葉の品詞によって、that 節の働きは違う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他動詞の後ろならば「目的語の名詞節」です。 ・be 形容詞の後ろならば「判断の原因を表している副詞節」になる。 ・have a 名詞の後ろの that 節は、名詞の内容を説明しているので「同格の名詞節」になる。 <p>おのおの文法的性質が違うので区別する。 It's ... that ... の that 節は、It を仮主語とした本主語の内容を表しているので、名詞節になる。</p>
<p>Chapter 13 ② >P175</p>	<p>It is hot in here. 話し手の判断だけを言う表現 There is a cat. 相手が気づいてないことを言う表現 This is a pen. 相手が知らないことを教える表現</p>	<p>“ It ” の仮主語、□□は補語 S + V + C : 存在を表す S + V + C の変形表現 (倒置)</p>
<p>形式的な主語</p>	<p>英語は、S-V1-V2 がないと文が作れない構造をしている。そして、S は相手が知っている物や事柄を使うのが原則である。 故に、相手が知らない物や事柄について述べる場合は、形式的な主語が必要になる。それが this that であり、there や here になる。これらの表現は、is の後ろの□□が「判断と対象」になり、その後に「伝えたい情報」を言う。</p>	<p>This is a ... の be は「不完全自動詞」で a 名詞 は「主格補語」、There is a 名詞 の be は「完全自動詞」で「存在を表す」、be は使い方によって3通りの働きと意味がある。 There is a 名詞 は a 名詞 が「主語」だが「倒置」になっている。</p>
<p>Chapter 14 >P177</p>	<p>be □□ と have a □□ と [do] 動詞のロジックを組み合わせ、SVOP で並べて全体の意味を作っている。</p>	<p>S + V + C と S + V + O が文の基本で be □□ は「be 動詞」が動詞なので□□は補語、「have a 名詞」では「a 名詞」が目的語になっている。</p>
<p>まとめ どんな文も SVOP</p>	<p>英文は、SVO と「先に話し手の判断と対象を言い」、その後ろにそれを説明する言葉を足して一つの文を表している。 このような英文の作り方は、 S が -V する / なる / である の -O で - [それは] P です。 という一つの訳し方で、文頭から理解できるのである。 be □□ の□□にはあらゆる言葉を使う。P にも「あらゆる言葉」を使う。語順で「働き」を決めているのである。</p>	<p>動詞を中心に考えるので、動詞の後ろの言葉を「補語」とか「目的語」と呼ぶ。また、進行形と受動態のときの be 動詞 は「助動詞」となるので、be 動詞 は「3通り」の働きがある。また、S + V + C や S + V + O で「文の構成に必要な要素」は完結しており、残りの要素の言葉は、全て「修飾語＝副詞 [句]」と呼ぶ。 品詞によってバラバラな用語で説明しているので、「同じ感覚で文を作っている」ということになかなか気が付かない。さらに、無理矢理日本語にしようとするので、後ろから訳し上げないと意味が通じないようにになっている。</p>

【本書の目的】

本書は、英語の基本を形作っている「ゲルマン語であるアングロ・サクソン語語源」の言葉の使い方を中心に説明をしています。それは、英語の基本である「会話表現」を身に付けるためには「アングロ・サクソン語」の使い方を理解する必要があるからです。
この「アングロ・サクソン語語源」の英語の使い方は「英語の祖語であるゲルマン語系」の使い方です。英語は「アングロ・サクソン語」を基本として「ラテン語やフランス語」などのロマンス語から大量の語彙を借入しています。現代英語の語彙数の大半はこれらの「借入語」です。「借入語」は Big Words と呼ばれ、ビジネス、学術、政治、法律などの用語になっており、日本語の「漢字の熟語」にあたります。借入語の動詞は「その語の意味がはっきりしている」ので1語で使われますが、堅苦しく響くので日常生活ではあまり使いません。日本語では、Small Words と呼ばれる「アングロ・サクソン語 (ゲルマン語) 系」の「短い言葉 (基本単語)」を組み合わせで使います。日本語の和語にあたります。
日本語の書き言葉では「平仮名で書かれる「和語」の間に、「漢字」で書かれる「中国語」が大量に使われる」と同じで、英語は「アングロ・サクソン語」の語順を基本ロジックとして「借入語」を大量にはめ込んで使っているのです。
「借入語」の使い方は、次巻で説明します。

Chapter 0

VSOP 英文法とは

主語の後ろの言葉は「話し手の判断」を表している

3通りの判断語 [V1+V2]

- [do] + 一般動詞
 - be + いろいろな言葉
 - have + 抽象名詞
-

VSOP メソッドの要点は、1つです。

それは、「英語の語順はワンパターン」なので、これに言葉を当てはめていけば、意味が分かり、通じる英文が作れるようになるというものです。

VSOP とは、Very Simple One Pattern のことです。英語のワンパターンの語順を、「SVOP」と表します。

SVOP とは、英語の基本語順を表す略号です。

文の初めで「何が」にあたる言葉 (Subject) を言い、その次に、「話し手の判断」を表す言葉 (Verdict)、その次に、「判断の対象になる言葉 (Object)」を言い、最後に、「それが、何だ」という言葉「叙述語 (Predicate)」を言うという語順です。

これらの各部分は、1語の場合もあれば複数語の場合もあり、どのような品詞の言葉が使われていても、この語順に従って意味を作っていくのが英語なのです。

特に、「話し手の判断」を表している言葉は「1語」の場合も「複数語」の場合も「大きく2つの部分」で作られており、その「後ろの部分」にはいろいろな品詞の言葉が使われます。

本書では、この「話し手の判断 (V)」を中心に説明していきます。全編を通じて、「話し手の判断を先に言う」という英語の特性の理解と運用が図れるように企画されています。

※「Verdict (判断語)」は VSOP 英文法の造語です。

私は飛行機で旅行するのが好きです。

多くの方は、海外旅行する時「英語がうまく使えたら」と思っているはずですので、本書では「海外旅行」をテーマにした例文を中心に解説していきます。

まず「私は飛行機で旅行をするのが好きです」と表現してみましょう。

以下の例文をみてください。

I like traveling on a plane.

I am fond of traveling on a plane.

I am in love with traveling on a plane.

I have a liking for traveling on a plane.

ニュアンスの違いはありますが、どの文も大体同じような意味で「私は飛行機で旅行するのが好きです」という日本語になります。英語は「類義表現」がとても多い言葉なのです。

ここで、注目して頂きたいのは、「I」(私が)の後ろの赤字の言葉です。

I like

私が好むのは

I am fond

私が好んでいるのは

I am in love

私が大好きな状態の中にいるのは

I have a liking

私が好みを持っているのは

これらの言葉は、いわゆる「文法形式が違っています」が、「区別してください」と言っているわけではありません。

まったくその逆で、「どの言葉も『好んでいる』という同じような意味を表している」と理解してください。

また、その後ろに **traveling(旅行)** という「好みの対象を表す言葉」が同じよう使われています。**traveling(旅行)** に、**of**、**with**、**for** など違う言葉が付いていますが、ここでは「何かの事情で違っているのだな」くらいに思っておいてください。大切なのは「赤字の部分が同じような意味」で、その後ろで「同じような内容の言葉」を使うということです。

“I(私が)の後ろの言葉は「**違う種類の言葉が、同じ働きをする**」のです。

CHECK

主語の後ろの

like
am fond
am in love
have a liking

は、同じ働きをしている。

[do]・be・have は「同じ働き」です

私たちは「英語の主語の後ろの言葉は『動詞』」と習ってきています。けれども、本当に「主語の後ろの言葉は動詞」でしょうか？

I like

私が好むのは

これは、like が「好む」という意味の動詞です。けれども、

I am fond

私が好んでいるのは

I am in love

私が大好きな状態の中にいるのは

これらは、「be 動詞 + fond(形容詞)」や「be 動詞 + in love(前置詞句)」が使われています。さらに、

I have a liking

私が好みを持っているのは

これは、liking (好きなこと) に a を付けて「have + 名詞」の形で使っています。

つまり、動詞以外のいろいろな言葉が同じような意味を表しているのです。

「be 動詞や have 動詞があるじゃないか？」と思う人もいるでしょう。

でも、本当でしょうか。

以下のように書き直してみます。

I [do] like

I am fond

I am in love

I have a liking

「like の前に do という言葉が隠れている」と考えるとどうでしょう？

疑問文で Do you like …?、と問い、その答え方は Yes, I do.、否定文で I do not like …のように、do が出てきて使われているのはご存じだと思います。

「動詞を使った平叙文には do が隠れている」と考えると、この「隠れている [do] と、am や have」は「前の方で、文の操作に使っている」ので「同じ働き」になります。

後ろの like (好む)、fond (好んでいる)、in love(大好きな状態の中にいる)、a liking (ある好み) の部分が、「～が好き」という意味を表しています。

ということは、「[do] と同じ働き」をしている be と have は「動詞」ではなく「助動詞的な操作語」と考えた方が良さそうです。

そして、like (動詞) と同じ内容を表している言葉は、fond (形容詞)、in love(前置詞句)、a liking (名詞) などで、「動詞でない言葉が、動詞と同じ働き」をしているのです。

主語の後ろの言葉は「同じ働き」、「話し手の判断」を表している

このような事実に従うと、英語の主語の後ろの言葉は「動詞」というような「一つの品詞名」で考えるのではなく、「どんな働きをしている言葉か」と考えた方が分かりやすいのです。

では、その「どんな働きか」ということを考えてみます。

この部分は、主語 (S)「私が」に続いて「好きなのは」と言っているのですから、「話し手の気持ち」を言っているようです。「主語 (S) に対する話し手の判断」とも考えられます。ですから、主語 (S) の後ろの言葉は「話し手の判断」を表していると考え、「好き」の部分を「判断内容語 (V2)」と呼びます。

そして、do や am、have は、疑問文とその応答や否定文など「文を操作する時」に使う「操作語」です。VSOP メソッドでは「助動詞」と呼ばずに「判断詞 (V1)」と呼びます。「判断詞 (V1) と判断内容語 (V2)」全体で「話し手の判断 (Verdict)」を表しているのです。

詳細は本文で繰り返し説明します。

まとめると、「主語の後ろは、いろいろな品詞の言葉を使って話し手の判断を表している」となります。

「品詞」で解釈しようとすると「この言葉の働き」がバラバラになり混乱します。「話し手の判断」と考えると「同じ働き」として、簡単に理解できるようになります。

0-03 SV は「話し手の判断」

O-P は「伝えたい内容」

VSOP メソッドでは、この「主語(S)」の後ろの言葉の「働き」を考えて「判断語:Verdict」と呼びます。VSOP メソッドでの造語です。

これまでの解釈法は、「主語+動詞+目的語+修飾語」となっていますが、「動詞」の部分だけが「品詞名」になっています。この部分を「判断語 (V)」という「働きを表す呼び方:語」に換えるのです。このVは **Verdict** のVです。

この判断語:Verdict の部分は「2つの要素」が組み合わさっています。これを [V1 + V2] と表します。V1は「判断詞」で、V2は「判断の内容」を表します。

そして、判断語:[V1 + V2] の後ろの言葉は「判断の対象」を表しますから「対象語:Object」と呼びます。今までの「目的語 (Object)」よりもその指す範囲が広い名前です。

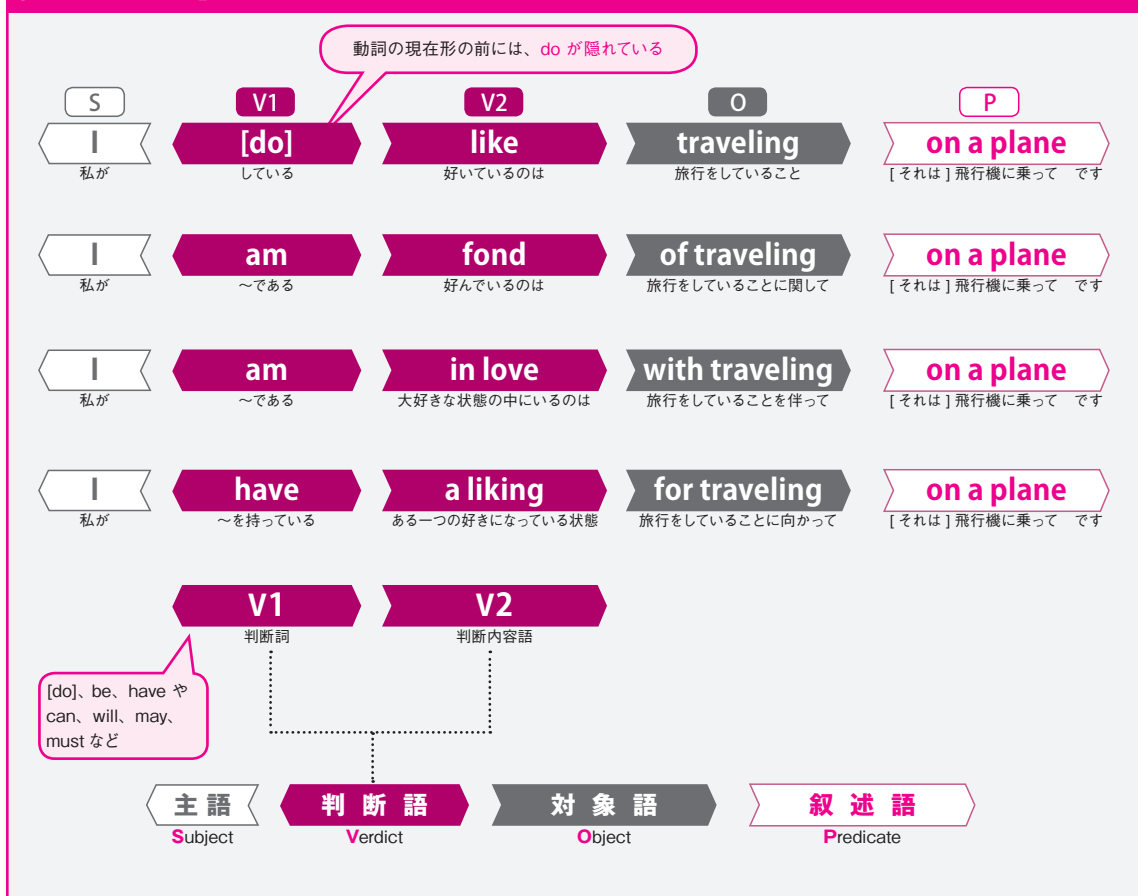
問題は、「対象語 (O)」の後ろに言う言葉です。ここでは on a plane です。

例文の S-V-O を前から順番に訳していくと「私が、好きなのは、旅行すること」となります。

on a plane の部分は、「それは、飛行機に乗ってです」というように、「旅行すること」に関しての「詳しい情報」を伝えている部分です。ですから、この部分を「叙述語:Predicate」と呼びます。これも造語です。

以上をまとめると、
「S-V」で「話し手の判断」を言い、「O-P」でその「判断されている中身」を言う
という「語順」になります。このパターンに言葉を当てはめていけば英語が理解でき、そして、英文も作れるのです。

S-V と「先に判断」を言い、その内容を後ろで言う



現段階では、このように説明されても簡単には納得できないと思います。初めて接する理解法だからです。

けれども、本書を読み進むうちにすぐに慣れます。

それは、本書にはこの考え方が出てこないからです。

今までの解釈法では「品詞によって分類する」ので、「補語、修飾語、進行形、受動態、完了形、熟語(イディオム)」などと、バラバラな説明になります。

けれども、SVOPで考えると「**全て同じパターンで使われており、言葉の意味が違うだけ**」というのが分かってきます。そして、このワンパターンに慣れるにしたがって、英語はどんどん簡単に感じられるようになってきます。

■ SVOPの訳し方

SVOPの訳し方は、一つです。

Sが-Vする / である / があるのは-Oに対してで
-[それは]Pです。

これはかなり不自然な日本語ですが、この「変な訳し方」が英語のロジックの「日本語訳」なのです。

この訳し方になれると「英語のロジック」が身に付き、文頭から語順通りに英文が分かり、自由に英文が組み立てられるようになります。日本人のアタマの中に英語アタマが組み込まれます。

英語は、1文型

Sが

Vなのは

Oに対して

[それは]Pです

V1

V2

※「Sが」というように「主語は『が』で」訳して、「Vであるのは」とか「Vするのは」というように、「判断語：Vは『は』」で訳しましょう。

【注】主語、判断語、対象語、叙述語、という用語は、「日本語の文節」の考え方を基にしています。

英語は、先にS-Vと「判断」を言って、その後ろにO-Pと「その判断の対象」を言う言葉です。

そして、「判断の言い方」にいろいろな形があり、いろいろな言葉を使いますが、どのような種類(品詞)の言葉を使っても、その働きはいつも同じなのです。

I [do] like

I am fond

I am in love

I have a liking

は「同じ働き」で、

「判断語」です。

「気持ち語」と呼んでもよいです。

have を be や do と同じように操作語として使うのは、イギリス英語です。

ですから、例文のようにいろいろな種類の言葉を使っても、同じような意味の文になるのです。

「今までの解釈法」では、この部分を「動詞」という「一つの品詞」でとらえていたために、バラバラな説明になり学習者を混乱させてきました。

主語の後ろの言葉を「判断語」という

「言葉の働き」で理解すると、

英語は「とても簡単なワンパターン」となりなおかつ

適切に使えるようになります。

これが、VSOPメソッドです

今までの英文法（五文型英語）で解釈しようとすると、

興味のない方は読まないほうがよい

- ① like は 「他動詞」なので、第3文型：S + V + O で、traveling は目的語になります。
- ② am fond は、 「be + 形容詞（補語）」なので、第2文型：S + V + C です。「fond は補語」、of traveling は「根拠を表す修飾語（副詞句）」です。be fond of で「～が好き」という意味の熟語（イディオム）です。
- ③ am in love は、 「be + 前置詞句」なので「説明できません」。
なぜなら、「be 動詞 + 前置詞句」の場合、「be 動詞」は「存在を表す」となっているからです。「私は in love の中に存在する」と考えるとおかしい感じがするのでも説明できません。ですから、be in love with（～がとても好きだ）という熟語（イディオム）とします。また、in love を「補語」とする考え方もあります。
- ④ have a liking は、「have は他動詞」で、「a liking は目的語」、for traveling は名詞の修飾語（形容詞用法）になります。また、have a liking で熟語（イディオム）と説明する場合もあります。

「読まないほうがよい」と書いておきましたが、説明が書いてある以上、お読みになった方が多いと思います。

このような説明で、先ほどの例文の意味や使い方が、ご納得頂けましたでしょうか？

そもそも「文型」だの「文法」だのと聞くのもいやな方が多いでしょう。

多分、これだけの文法用語とその定義をきちんと覚えていらっしゃる方は希（まれ）でしょう。このような用語を使って説明できるのは英語の指導者だけでしょう。学校などの英語の先生は、これが説明できることで、教員資格を授与されています。

ところが、別の説明の仕方もあります。

さらに、上記以外の説明もあります

●「be fond of … は、like と同じ意味で、全体で「他動詞」と同等の働き」をしています。熟語（慣用表現）ですから覚えましょう。

■今までの解釈法に従って学んでいくと

上記の説明に従うと、
be + 形容詞 + of … は「第2文型：S + V + C + M」で、
他動詞 + 目的語 は「第3文型：S + V + O」で、
ともに「同じ意味」ですから、「区別して理解する必要はない」と言っていることになります。

はじめに「別の文型ですから、区別できるようにしましょう」と教えて、学習が進むと「同じだから区別しなくてよい」と言い直すことになります。何のためにわざわざ苦勞して文型に分けているのでしょうか？

このような無駄な回り道が、学習者の混乱の原因です。さらに、説明が上手くない③④の使い方は、熟語（イディオム）と呼んで文法的な説明を避けます。「熟語（イディオム）」という言葉で「英語解説用語＝文法用語」として使うのです。さらに悪いことに「文法で説明できない表現」は、あまり教えられていません。

外国語の習得には「文作りの規則（文法）の説明、解釈」を頼りにしなければ、十分な理解は得られないはずで

もっと簡単に理解できる方法は？

解決法は …… 「言葉の働き」を「品詞」で分類しなければよい

品詞で分類せずに、「言葉の働き」で考えれば英語は

S-V-O-P ワンパターンです。

Chapter 1

判断語とは

Three types of Verdict

判断語の3つタイプ

[do] Verb

be Various

have Noun

VSOP メソッドのワンパターン「SVOP」について一気に入りましたが、今までの英語の解釈の仕方と随分と違うので、初めは戸惑われるかと思います。

けれども英語の理解の要点はこれだけです。

どのような英文も「そのまま SVOP」か、またはその変型、複合、省略、倒置などの操作がされているだけです。

このロジックを身に付けることが英語の学習であり、このワンパターンを体得するのが本書の目的です。

あらゆる英文をこのワンパターンで説明していきますので、すぐに慣れるかと思えます。

3通りの基本的な表現

英語で「判断の表し方」は3通りあります。

- ① **[do]** + 動詞
- ② **be** + いろいろな言葉 (以後“□□”で表記します)
- ③ **have** + 抽象名詞

Chapter 0 で使った例文と同じように、多くのことがこの3通りの言い方ができます。ここでは「私はそのアメリカでのツアーについて知っている」という例を使ってみます。

この場合も3通りの言い方ができます。

- ① **I [do] know of the tour in the USA.**
- ② **I am aware of the tour in the USA.**
- ③ **I have some information about the tour in the USA.** ※日本語の「アメリカ」は **the USA** と表記します。

■ 英文の理解は、「判断語」から

それでは、SVOP に慣れるよう、最も重要な「判断語：[V1 + V2]」の使い方の中身を少し詳しく説明します。

■ 判断語は「3通りのパターン」がある

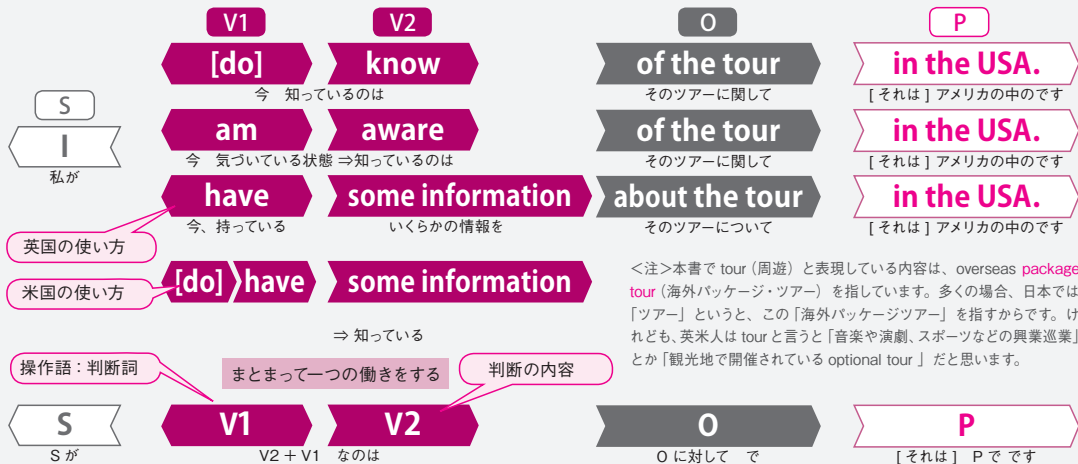
主語の後ろの言葉は、いろいろな表現の仕方がありますが、使う言葉の種類で大きく「3通り」に分けることができます。そして、この「3種類の言葉」が「同じ働きになっており、ワンパターンだ」ということから説明していきます。

この3通りの表現を司っているのは [do] ・ be ・ have の3つの言葉です。「(be 動詞) は、be (ビー) と呼びます) 同じように文の操作に使いますから、「同じ働きをする言葉」と考えて「判断詞」と名付けました。これらの言葉は、いずれも「事実だ」という話し手の判断を表すときに使います。

■ have + 抽象名詞は2通りの使い方がある

ひとつ煩わしいことがあります。それは、アメリカ英語とイギリス英語では、have の使い方に違いがあることです。イギリス英語では「～がある」と言うとき「have」を操作語で使い、「～する」と言うとき「[do] have」で do を使います。アメリカ英語では、どちらも do を操作語に使います。ここでは両方の使い方を並記しながら、[do] ・ be ・ have を同じように使う様子を説明します。

● 肯定文



■ 否定文の作り方

それでは、[do]・be・have を使った「基本的な文の操作」を説明します。

「文の基本的な操作」とは、「否定文の作り方」と「疑問文とその応答の仕方」です。

これら使い方を通して「判断語：[V1 + V2]の使い方」の理解と、さらに、SVOP の一部分が省略された形を説明します。

■ 否定文

否定文は、「～ではない」という「打ち消しの意味」になる文です。日本語では、「～でない」「～ではありません」のように、「ない」や「ん」が「文の最後」で使われますが、英語では、not を「2つの話し手の判断(V1+V2)の間：中位」で使います。

■ not の位置

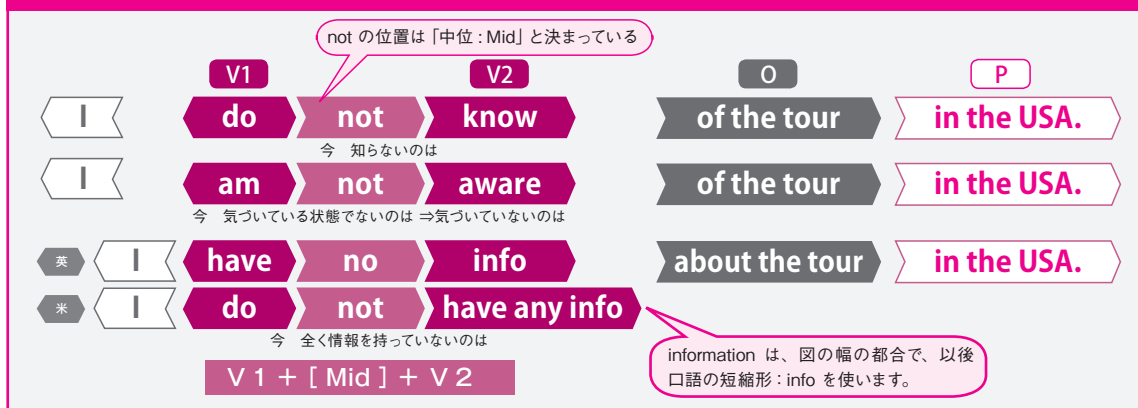
この not を使う場所は [V1 + not + V2] というように「判断語の2つの要素の間」になります。

- ① I do **not** know of the tour in the USA.
- ② I am **not** aware of the tour in the USA.
- ③ 《英》 I have **no** information about the tour in the USA.
- ④ 《米》 I don't have **any** information about the tour in the USA.

訳：私が知らないのは、そのツアーについて、[それは] アメリカなのです。

【語注】③の英式では no (～が何もない) を使い「何も情報がない」という表現になり、④の米式では not ~ any …で「情報を[まったく]持っていない」という表現になります。現在は no info と not ~ any info のような2つの表現が混在しており、英語圏ではどちらも使っています。

否定文：～ではありません（補助的な判断）



★ 否定語の位置

「～ではない」と打ち消す言い方は、普通、判断語：[V1 + V2] の間に not を入れて使います。not はこの位置から「後ろの判断の内容 (V2)」を打ち消します。

この [V1 + V2] の間の位置は、とても重要な位置です。それは not 以外にも「いろいろな補助的な判断語」をこの場所で使うからです。この位置を「中位：[Mid]」と名付けます。(Middle Position：中位)

もう一つは、have no info のように have no 名詞の形です。この表現は「無い情報を持つ」で「情報が無い」という意味になり日本人に馴染みにくいのですが「have □□+名詞」の□□は、not と同様「話し手の補助的な判断」を表す働きをしています。

ですから、日本語にすると「情報が無い」のように「述語」で訳すことになります。

また、have not info と言えないのは、not が「～ではない」という「打ち消す」意味だからで、not info と言うと「情報でない」という意味になり、この場合は変だからです。

それから information (情報) は、数えられない事柄(不可算名詞)なので、a/an は使わず some か any を付けます。a/an も some/any も話し手の判断を表す言葉です。

英語は位置によって言葉の働きが決まるので、V1 + [Mid] + V2 という語順はとても重要です。この中位：[Mid] では、いろいろな品詞の言葉が「補助的な話し手の判断」を表すのに使われるからです。

中位：[Mid] の重要性

■補助的な判断を表す言葉

not の位置：中位 (Middle Position) はとても重要です。なぜなら、話し手の判断をより詳しく説明する「補助的な判断を表す場所」だからです。

判断語の基本は、3通りの言い方です。

- ① [do] + 動詞
- ② be + □□
- ③ have + 抽象名詞

これらの基本表現は「事実だけ」を表します。

そして、会話などで「気持ちや様子、程度」などを詳しく表そうとする時、[V1 + V2] の間：[Mid] でいろいろな言葉を使います。

- [do] + [Mid] + 動詞
- be + [Mid] + □□
- have + [Mid] + 抽象名詞

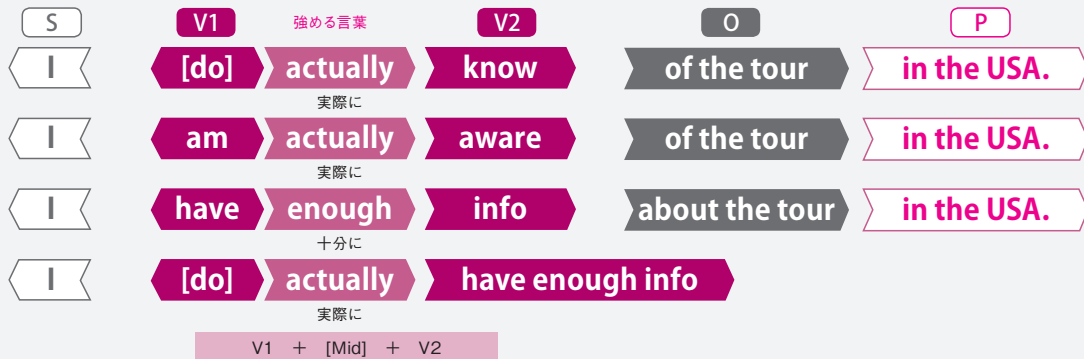
■補助的な判断 actually (実際に) を入れた例

私はそのアメリカのツアーをよく(実際)知っています。

- ① I [do] actually know of the tour in the USA.
- ② I am actually aware of the tour in the USA.
- ③ 《英》 I have enough information about the tour in the USA.
《米》
① I [do] have enough information about the tour in the USA.
② I [do] actually have enough information about the tour in the USA.

※ enough：十分な／十分に
「気持ちや様子、程度、範囲」など「補助的な判断」を表す言葉はたくさんあります。英語は先に話し手の判断を言うわけですから、いろいろな判断の表し方をしないと単調になってしまうからです。

S-V1 [Mid] V2-O-P 話し手の気持ちの入った「自然な発話」



■補助的な判断を表す言葉

このような「補助的な判断を表す言葉」にはいろいろな種類があります。very (とても)、so (とても)、a lot (とても)、really (本当に)、too (非常に～すぎる)、a bit (少し)、a little (少し)、almost (ほとんど)、never (決して)、rarely (まれに)、always (常に)、quite (まったく)、particularly (特に)、absolutely (絶対に) など、とてもたくさんあります。

そして、これらの言葉がどのような言葉と結びついて使われるかには、一定の決まりがあります。けれども、本書では「使用上の制限」などの詳しいことは述べません。

それは、基本となる「判断語：[V1 + V2]」の全体像を説明するのが本書の目的だからです。判断語の全体が把握されていないならば「補助的な判断語」の全体像も説明できないからです。

ここでは「判断語の2つの要素の間 [V1 + [Mid] + V2] に、『補助的な判断を表す言葉』を使う」ということを理解してください。それは、自然な発話にしようとすると思わず出てきてしまう言葉なので、いろいろな例文で突然使われていることがあるからです。「補助的な判断を表す言葉」の説明は Chapter 6 でまた行います。

V1 だけで、
前出の内容 (V2 以下) を表す

■ 疑問文の作り方

Do you know ...? ...を知ってますか?
Are you aware ...? ...に気づいてますか?
Have you any info ...? ...の情報、持ってますか?

英語は、do・be・have を主語の前に持っていく、Do you、Are you、Have you という「語順」で疑問の意味を表します。

■ 疑問形

日本語の「～ですか?」の「か」が、英語では「語順」になっています。この語順を記号で表すと、V1-S-V2 というワンパターンになります。

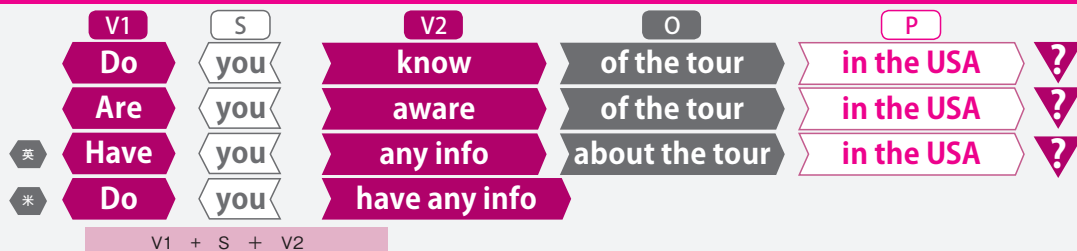
この語順は、あらゆる疑問文で使われますから「疑問形」と名付けます。

動詞に隠れている [do] や be、have が判断詞 (V1) で、know、aware、any info が判断内容語 (V2) です。このように考えると、疑問文でも英語はワンパターンで使っていることが分かります。

■ 語尾を上げるだけでも疑問の意味になる

話し言葉 (口語) の場合、この語順にしなくとも「文尾を上げて」言えば疑問の意味になりますが、きちんと話すのであれば、やはりこの疑問の語順を使います。これは日本語でも同じです。

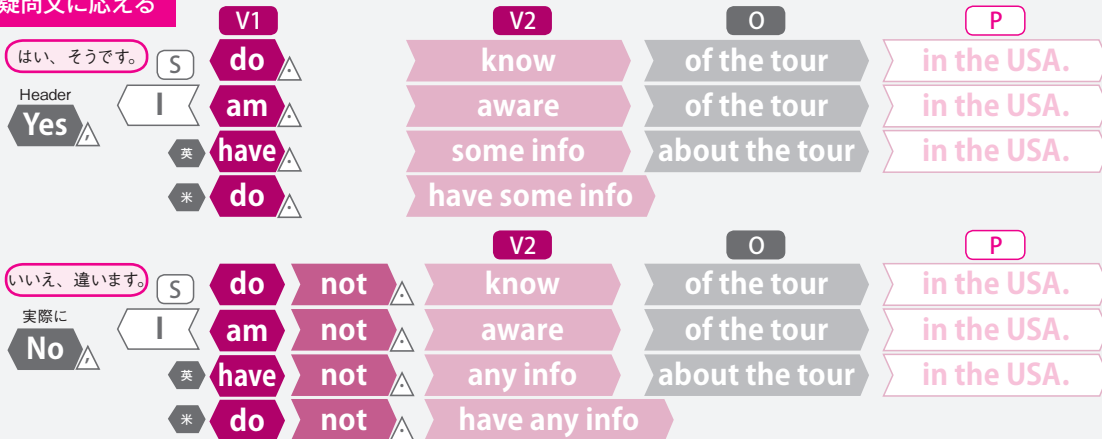
疑問文にするとき ~ですか?



この語順が「疑問の意味」を表す

V1 が V2 以下の内容を代表して省略する

疑問文に答える



■ 答え方

Do you know ...? と聞かれたら、Yes, I do. No, I do not. と答えます。この場合 do は「相手の言った内容全体」を表します。「know (動詞) から後ろにある内容」を一語で代表して表しています。

be や have が使われた場合は、Yes, I am. No, I am not. や《英》Yes, I have. No, I have not.、《米》Yes, I do. No, I do not. です。be や have は、do と

同じように「相手の言ったこと全体」を表します。

このような判断詞 (V1) の使い方が英語の「応答の基本」です。それと同時に「省略の基本」でもあります。

英語の応答は、相手の言った「主語 (S) と判断詞 (V1)」を使います。どのような場合も、判断詞 (V1) は「相手の言った内容や前出の内容全体」を表せます。このような判断詞の使い方はとても重要です。判断詞 (V1) は「判断内容語 (V2) 以下の内容」を表します。

■ 相槌を打つには

相手の言った文の do・be・have を使うのが応答の基本です。ですから、「相槌を打つ場合」にもこの形が使われます。

相手の言ったことに、「そうですね。」とか「そうなのですか？」と、オウム返しに「相槌を打つ」場合、相手の言った文の S-V1(do・be・have). を言います。

<例> 相手が言った文

「私はそのアメリカツアーのことを知っている」

- ① **I [do] know of the tour in the USA.**
- ② **I am aware of the tour in the USA.**
- ③ **I have some info about the tour in the USA.**

⇒ 応答文: 「そうですねですか」

- ① **You do.**
- ② **You are.**
- ③ **《英》 You have. 《米》 You do.**

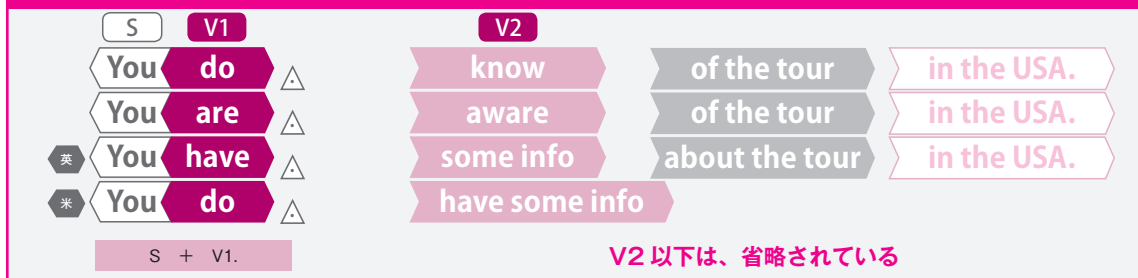
■ 相槌の注意点

相槌を打つには、相手の言った主語 (S) と、[do]・be・have を使います。be[is, am, are / was, were] や have が使われる場合は「その言葉を相手が実際に言っている」ので分かり易いのですが、動詞が平叙文で使われた場合、do は隠れているので「聞こえません」。ということは、「相手が『動詞』を使った」と即座に判断して、**You do.** と言わなければなりません。これは日本人にはなかなか慣れるのが難しいことです。

もう一つ注意しなければならないのが、have を使った時です。イギリス英語では You have. と have をそのまま使いますが、アメリカ英語は You do. と do を使います。最近では、アメリカ英語の影響で、イギリスでも have に対して do で応答する人が増えています。

相槌を打つときは、相手の言った文の「主語 (S) と、判断詞 (V1)」で応答します。

相槌を打つ時は「そうですね。」



確認や疑問を表す時は

そうですねですか？

■ 疑問の意味を持って聞き返す応答文

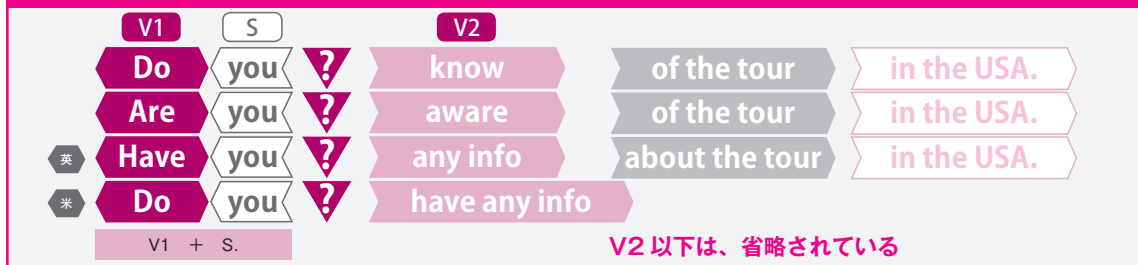
相手の言ったことに「疑問を持った場合」は、V1 - S? の形の疑問形で答えることになります。上げ調子になります。

- ① **Do you?**
- ② **Are you?**
- ③ **《英》 Have you? 《米》 Do you?**

■ 確認するための 応答文: 「そうですねですか？」

相手の言ったことに「さらに確認する時」は、V1 - S? の「疑問」の形で、下げ調子になります。

そうですねですか？



これまで使った3つの例は、判断語 (V1 + V2) の意味が各々違いますから、当然、ニュアンスの違いはあります。けれども、「そのツアーのことを知っている」という同じ内容を表しています。

もちろん、あらゆる内容がこの3通りの方法で表現できるわけではありません。「[do]・be・have の3通りで表現できる内容がある」ということで、表される意味、内容によって、できるものとできないものがあります。

■ [do]・be・have の意味

[do]・be・have は「事実である」という判断を表すということでは共通しています。ここではおおまかな違いを説明しておきます。これらの具体的な使い方は、各章の中で説明していきます。

- ・ S [do] 動詞 は、「S が～をする」という意味です。
主語の「能動的な行為」や「状態」を表します。
- ・ S is □□ は、「S が□□だ／である」という意味です。
「S が□□の状態の中にある」という「受動的な状態」を表します。□□の部分には「あらゆる種類の言葉 (全ての品詞)」が使えます。
- ・ S has 名詞は、「S が～を持っている／S は～がある」という意味です。
「S が、主体的かつ支配的に『その事柄』をする」という意味を表します。

■ [do]・be・have の関係 ⇒ 三角関係になっている
be と have は、ともに「～がある」という意味ですが、「主體的」か「受け身的」かという「対照的な判断」を表します。
例えば、「私はその旅行計画がある」は、

I have a travel plan. 私はある旅行計画を持っている。
The travel plan is in my mind. その旅行計画は私の心の中にある。
The travel plan is mine. その旅行計画は私のものだ。

のように何通りかの表現ができます。

A have B. は B is in A. というように、「主語 (S)」と「判断の内容 (V2)」とを「前後逆」にして表せます。
これらを組み合わせると以下の文になります。

S V O P
I have a travel plan [is] in my mind.

これが「SVOP が整った基本文」で、全体で「私はある旅行計画がある」という意味になります。

[is] は、O と P の関係を表している隠れた判断詞です。このように「**隠れた判断詞による、主語・述語関係**」を「**ネクサス (nexus)**」とよびます。

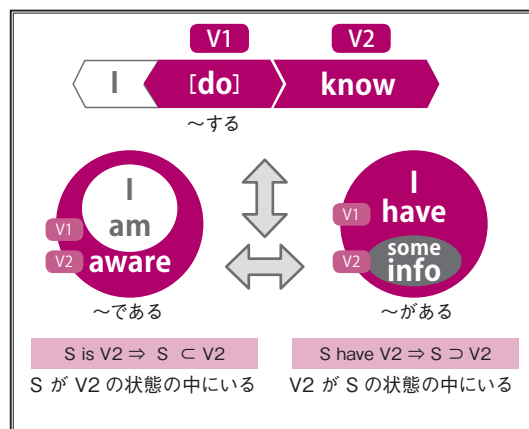
「have と be が英語の動詞の中で使用頻度が最も高い」のは、be □□ (□□の状態である) と have a □□ (□□の状態がある) という基本ロジックを表すからで、他の動詞 (make, take, bring, give など) とは別物なのです。

・ [一般] 動詞: do (する) + 動詞 (動きの内容)

「do + 動詞」は「動作や行為をする」という「動き、変化、移動」を表します。現在形の平叙文では、普通、do が隠れて「動詞1語」の形で使われます。

動詞の現在形で [do] が隠れてしまうのは、現在形が「動作や行為をする」ということを表すのではなく、「しばらく変わらない今の状態 (事実や習慣、真理など)」を表すからです。(P55 参照)

同じように、動詞の過去形 ([did] + 動詞 ⇒ 一語の過去形) も、「過去に動作や行為をした」という「事実」を表します。「実際に動作や行為をする」と言うときは、be doing や have a do, take a do のような別の表現になります。これは分かりにくいことですので、後ほど Chapter 9 で詳しく説明します。



■ [do]・be・have が表す論理関係の違い

- ・ be は「～の中にある」⇒ C (～に含まれている)
 - ・ have は「～を持っている」⇒ D (～を含んでいる)
- どちらも「静止した状態」を表し、対照関係になっている。「**支配的: 能動か、被支配的: 受動か**」の「**状態の違い**」を表す。
- ・ do は、動作や行為、状態の変化を表す。

<注> 今までの解釈では、「do・be・have に、おのおの【助動詞】と【本動詞】の使い方が」とされています。けれども、この分け方をすると実際の使い方を説明しにくいので、新しい名前「**判断詞**」と呼ぶのです。この「**判断詞**」という名前で、いろいろな表現が理解できます。

■ have は一番使われる動詞

英語のデータベース「コーパス」では、「have は一番使用頻度の高い動詞」となっています。

けれども、我々日本人は「be □□」の形はある程度理解していますが、「have + 名詞」で一つの意味を表す言い方にはあまり慣れていないようです。

■ have は「～を持っている ⇒ ～がある」

have は重要な言葉ですから、真っ先に I have a book in my hand.(私は手に本を持っています)のように習います。この時に「本を持つ」というような「具体的な動作」と思ってしまいがちですが、have は「持つ」という「具体的な動作」を表す言葉ではありません。「～がある」という状態を表す補助的な言葉です。

I have some money with me.

お金、いくらか今あるよ。

I have a lot of sports cars in my display cabinet.

私はたくさんのスポーツカーを持っています、私の陳列棚の中に。

My wife has black hair and brown eyes.

私の妻が持っているのは、黒い毛と茶色い目をです。

The store had a variety of antique dolls for sale.

その店が、いろいろな骨董人形を持っていたのは、売るためのです。

以上の例文のような「具体的な名詞」が have の後ろで使われると「対象語」になり、have は「所有している状態 ⇒ 具体的な物がある」という意味を表します。

それに対して、「持つ」という「具体的な行為」は、hold (>held) や take (>took)、carry などが表します。

I took my cell phone from my desk.

私が取った=持ったのは、携帯を、机からです。

I held my cellular phone firmly.

私が持ったのは、携帯を、しっかりと。

I carry my cellular phone [with me] all day long.

私が持って[歩いて]いるのは、携帯を、一日中です。

では、このような性質がある have が、どうして使用頻度が高くなるかという点、「後ろの言葉と組んで一つの意味を表す使い方」をするからです。

I don't have a clue about the future of Japan.

私が持っていないのは手がかり、将来について、[それは] 日本のです。
⇒ 日本の将来について、分からない。

clue(手がかり)のような抽象的な内容の言葉が、have の後ろで使われている場合、まとめて1つの言葉(判断語)になります。

* [追加語例] ⇒ 「握る: grasp、grab」や「つかまえる: seize、catch」も「具体的な行為」を表します。

それは、このような使い方が「決まり文句」とか「慣用表現」などになっていて、ごく少数の用例を覚えていただけなので「特殊な使い方」のような印象を持っているからです。けれども、have は英語の表現の中で重要な表現ロジックを司っている言葉です。

ここでは、have の使い方について説明します。

■ 「have + a 動詞」の言い方(判断語)

動作や行為を表す言葉(動詞)に a を付けて、have と一緒に使うと「一回～をする」という意味を表します。

have a talk with ...	話をする
have a look at ...	ひと目見る
have a dance with ...	踊る
have a walk with ...	散歩する
have a drink with ...	1杯飲む
have a word with ...	議論する

また、これも「～する」という意味になりますが、「have の後ろの言葉に関係する行為をする」という使い方もあります。

have breakfast/meal*	朝食/食事をする
have a headache	頭が痛む
have a party	パーティーを開く
have a conference	会議を開く
have a game	試合をする
have a picnic	ピクニックに行く
have tea/coffee*	紅茶/コーヒーを飲む
have a cold	かぜをひいている
have fun*	楽しく過ごす
have an adventure	冒険をする
have an accident	事故に合う
have an operation	手術を受ける
have snow*	雪が降る
have a hand	参加する

* a/an がないのは「一つの」と「数えられない事柄」の場合です。

このような使い方は「have の後ろの言葉」によって、「飲む」、「食べる」、「吸う」などいろいろな意味になります。

通常、このような使い方を「熟語(イディオム)」と呼んでいますが、ほとんど無限の組み合わせがあるので、ロジックを理解しなければ使えるようにはなりません。

1-08 have の使い方②

■ have + 抽象的な名詞 (判断語)

さらに、「感情や考えを持つ(する)」という意味でも使います。多くの場合「～がある」という日本語になります。

have an idea	ちょっとした考えがある
have an interest	ある興味がある
have a thought	ある考えがある
have a notion	ある考えがある
have an opinion	ある意見がある
have an image	あるイメージがある
have a taste	ある好みがある
have a favor to ask	[人]に頼みがある

※ この場合の favor は「相手の好意」を指す

また、もっと抽象的な言葉も使われます。

have a way	方法(すべ)がある
have time	時間がある
have a place	場所がある
have a chance	機会がある
have a problem	ある問題がある
have trouble	ある困難な問題がある
have a right	ある権利がある
have difficulty	困難がある

これらの have も「～がある」という日本語になります。

■ have + a good + 名詞 ⇒ 「～が良い」

ところが、具体的な名詞に、good(よい)が付くと、別の日本語にしなければならなくなります。多くの場合、「□□が良い」と訳すと通じます。

have a good brain	頭が良い
have a good build	体格が良い
have a good character	性格が良い
have a good eye	目が良い(高い)
have a good memory	記憶力が良い
have a good nose	鼻が良い(利く)
have a good salary	給料が良い(高給を取る)
have a nice dream	夢見が良い
have a good dress sense	洋服のセンスが良い
have a good life	暮らしが良い
have a good location	立地条件が良い
have a good grade	成績が良い
have a good reputation	評判が良い
have a good sale	売り[上げ]が良い

名詞の前で「補助的な判断」を言う

また、good が「□□が十分である」と理解できる場合もあります。これは、good が「必要なものが十分にある」という意味で「良い」と判断しているからです。

have a good breakfast	朝食が十分である(食べる)
have a good appetite	食欲が十分ある
have a good effect	効果が十分ある
have a good grip	理解が十分ある
have a good sleep	睡眠が十分である
have a good background	経験が十分である
have a good diet	食生活が十分である
have a good excuse	理由が十分ある
have a good future	将来が十分ある
have a good ground	根拠が十分ある
have a good knowledge	知識が十分ある
have a good laugh	大笑いする、思う存分笑う
have a good mind	気持ちが十分ある
have a good reason	理由が十分ある
have a good skill set	技術が十分ある
have a good chance	見込みが十分ある

■ 「have a □□+具体的な名詞」⇒「□□は判断」

以上見てきたように、「have a □□+名詞」の形では、「□□」の部分が日本語の「述語」に対応するようになっています。これは、have の後ろの「a □□」の部分が「話し手の判断」を表しているからで、後ろの具体的な名詞は、その判断に対する対象語を表しています。

ですから、この部分がないと「意味が通じない表現」があったり、この部分を入れ替えると、まったく別の日本語訳になったりします。

have a good opinion of...	～を高く評価する
have a good time	楽しく過ごす
have a good cry	思い切り泣く
have a good job	いい仕事をしている
have a good lesson	良い経験をする
Have a nice day.	よい日を過ごしてね。 (別れる時に言う「ごきげんよう」の意味になる)
Have a nice trip.	楽しい旅行をしてね。
Have a good night.	安眠してね(おやすみ)
Have a good time on your holiday in Hawaii.	ハワイでの休日を楽しんでください。

have は英語を理解する上で重要な言葉です。是非理解しておいてください。

■ SVOP の全体像について

「話し手の判断」の基本の形を説明しましたが、個々の判断語の説明に入る前に、もう一つ重要なこと、「SVOP の各々の言葉の働き」を説明しておきます。SVOP の各々の要素の「内容」についてです。もう一度基本例文に戻ります。今度は SVOP の直訳を付けます。

- ① I **do** know of the tour in the USA.
⇒ 私が知っているのは、そのツアーに関して、
[それは] アメリカの中でのです。
- ② I **am aware** of the tour in the USA.
⇒ 私が気づいているのは、そのツアーに関して、
[それは] アメリカの中でのです。
- ③ I **have some info** about the tour in the USA.
⇒ 私が情報があるのは、そのツアーについて、
[それは] アメリカの中でのです。

普通の日本語訳だと気づかないのですが、左記の直訳をみても、

前の方の「話し手の判断」は、抽象的で漠然としており、後ろにいくに従って、言葉の内容が**具体的になる**ということに気づきます。

これは、一つの文の中で「起承転結」という感覚で意味を作っているからです。

S 私が	⇒主語	(話の発端=起)
V 知っているのは	⇒抽象的判断	(「発端」の説明=承)
O そのツアーで	⇒具体的な対象	(話題を提示=転)
P [それは] アメリカの中でのです。		
	⇒より具体的な説明 (伝えたい情報=結)	



今までの解釈では「文の後ろの言葉は『修飾語』」となっていますが、この「修飾語」という言葉は、「オマケ言葉」的な響きを持つ言葉です。

ところが「後ろの方の言葉は、より具体的な内容を表している」のですから、実は「大切な情報」です。

上記の例文では in the USA (アメリカの中で) と最後に言った時、「何のツアーか」が分かり、相手は納得します。

英語は、先に「抽象的な判断」を言い、後ろで「その具体的な情報」を言う言葉です。

日本語の語順と、発想が全く逆になっています。

この「日本語と逆の発想」を身に付け、情報をきちんと言うように心がけることが英語でとても重要なことです。

■ 判断 (S-V) の後ろの O-P は「一文」になっている

もう一つ重要なことは、the tour in the USA. という O-P のまとまりが「一つの文になっている」ということです。それは、間に is を入れると一つの文になることから分かります。このような言葉の関係を「ネクサス」と言います。

The tour **is** in the USA.

そのツアーはアメリカの中で [行われま] す。

■ 判断の内容は 一つのまとまった事柄 (一文) で表す

話し手の判断を S-V と言って、後でその内容を言うわけですから、「判断の対象 (O)」を言うだけでは十分な情報は伝わりません。「まとまった内容」を伝えるには「主部と述部」が必要ですから、「O を主部」として「P が述部」になるように説明を付けるのです。

■ 叙述語 (P) は「いろいろな言葉」を使う

「叙述語 (P)」は、上記のように「O を説明している言葉」だけが使われるわけではありません。「いろいろな言葉」を使います。例えば、

I know the tour **well**.

私が知っているのはそのツアーに関して、
[それは] 十分にです。

この場合の well は I know the tour という SVO 全体に対して「[それは] 十分にです」と情報を足しています。

このように言うのが難しく感じられますが、このような違いを意識する必要はありません。SVOP で訳すと同じになるからです。SVO と話題を言って、その後ろに「それが何だ」と伝えたい情報 (P) を続けて言えばよいだけです。

■「叙述語 (P)」では、伝えたい情報を言う

「叙述語 (P)」は、SVO という話題に対して「[それは]何だ」と言う部分です。どのような表現があるか、別の例で見てみましょう。

I am happy with the tour

私が満足しているのは、このツアー

これは、SVO だけです。with the tour(ツアーと一緒にいる) が I am happy(私が満足している) という判断の「対象 (O)」になっています。

この話題をもとに、いろいろと「伝えたい情報」を続けてみましょう。



⇒ このツアーに満足しているのは

■ 言いたいことをどんどん言う

言いたいこと (P) は、[for] now (今) のような一語の場合もあります。また、and(そして)、but(しかし)、though(～だけれども)、when(～する時) のような接続語を使って、1つの文で表す場合もあります。また、that(それは) や which(それは) のような、「対象語 (O)」を説明する文を続ける言葉 (関係詞) を使う場合もあります。

叙述語 (P) は「伝えたいこと (TPO 情報など)」を言うのですから、いろいろな形の表現があります。

that(それは) とか、who(その人は) とか、which(その物は) のような言葉は、「説明語を、一つの文の形で言う」ための「つなぎ言葉」です。このような場合「叙述語 (P)」の中が、SVO-P[svo(p)] というように「入れ子」になります。

※ VSOP メソッドでは「一つの文の中に入れ子になっている文」を「svop」と表します。

本書は、「SVOP の基本である『判断語』を説明する」のが目的です。まだ説明が始まったばかりですから、このような複雑に組み合わせた「長い叙述語 (P)」を例文として使えません。本書での例文は、短い言葉を選んで「叙述語」で使っています。ですから、どうしても中途半端な内容の文になりがちですが、文の内容が十分かどうかにかかわらず、「判断語」という考え方の理解に集中してください。学習を進めるうちに、「叙述語 (P)」の内容も、段階を追って充実させていきます。

叙述語 (P) の「いろいろな使い方」は、次巻で詳説します。

P
[for] now

今のところは です

※ [is] はネクサス

[is] P
in the USA.

[それは] アメリカの中で行われます

[is] P
,"Discover Tuscany"

[それは] 「トスカナ発見」[というコース名] です

[is] P:v2 O
available for special events

[それは] 参加できるのは特別な行事にです

[is] P:v2 O P
running smoothly

[それは] 順調に動いているからです

Conj. P:s v1 v2 O
and the conductor is a cool guy.

そして、[それは] 添乗員が格好いいからです

Conj. P:s v1 v2 O
but the conductor is an awful person

しかし、添乗員がいやな奴です

Conj. P:s v1 v2
because the cost is low.

なぜなら、費用が安いからです

Conj. P:s v1 v2 O P
when I get to know somebody new

その時は、新しい人と知り合えた時です。

※ when を使うと I am は I become になる。

Conj. P:s v1 v2 O P
that brings me a new challenge

それがもたらしてくれるのは、私が新しい挑戦に向けてです。

Conj. P s v1 v2 O
[which] you introduced to me

君が私に紹介してくれた

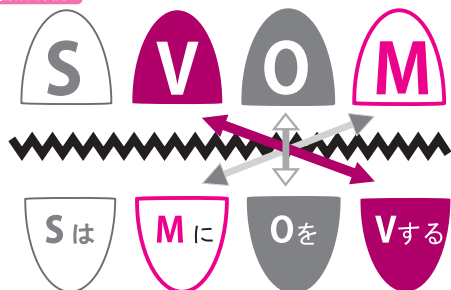
Conj.= Conjunction: 接続語

P:s: 叙述語 (P) の中の主語 (s)

<注> and(そして)、but(しかし)、that(それは)などは「文を続ける言葉 (接続詞)」ですが、使い方によっては「なぜなら～だから」というような意味で後ろの言葉が続いている場合があります。because(なぜなら～だから)は「論理的な原因(その理由は～です)」を表す言葉で、強い因果関係を表すときに使いますが、because だけが「理由を表す」わけではありません。

今の解釈法で学んで行くと

English Mode



日本語ロジック

今までの解釈法に従って英語を学んでいくと、常に「語順をひっくり返して解釈しようとする習慣」が付き、最後まで聞かないと文意がつかめないようになってしまいます。理解に時間がかかり、実用的ではありません。また、いろいろな表現に対して、その都度解釈が違うので用語がバラバラになっていて混乱します。結局、いつまで経っても英語のロジックが身に付きません。最後は、「文法は無駄だ!」と叫び、丸暗記に走るようになります。

VSOPメソッドのS-V-O-Pは、英文の基本大原則 [メタモデル] です。
SがVする/であるのはOに対して [それは]P です。

※ V は、一般動詞だけでなく、[be □□] や [have +抽象名詞] も V の働きをします。

このように SV と「先に判断を言う言葉 (ゲルマン語系の英語やドイツ語)」は、判断の後ろの「判断されている内容」を「一つの文」にしなければ十分な情報を相手に伝えることができません。

ですから、V の後ろの「判断の対象: O」は、「対象」であると同時に、判断に続く内容を表す文の「主語」になり、その後ろに「その叙述」をします。

通常この「対象語」の部分が「名詞や代名詞だけ」の場合を「目的語」と呼んでいますが、「目的語」は、同時に「判断されている内容を表す文の『主語』」なのです。当然、後ろに「それが何だ」を表す「叙述: P」が付かなければ意味は完結しません。ネクサスです。

このような居屈っぽい説明は「退く (ヒク) 方」が多いでしょうし、また、変な日本語訳に戸惑うかもしれません。それは、慣れていないだけです。英語の語順はこれしかありませんからすぐに慣れます。

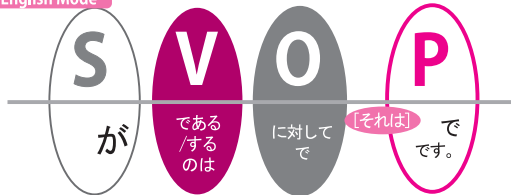
英文は「後ろから日本語に訳しあげることができる場合」は非常に限られています。

けれども、SVOP はどんな場合も当てはまります。

SVOP を身に付けると

第一段階: 日本語で文頭から理解する

English Mode



日本語変換

第二段階: 英語のロジックに慣れる

English Mode



日本語変換

第三段階: 日本語が必要なくなり、英語になる

English Mode



日本語変換

SVOP の訳し方は英語のロジックそのものですから、この理解の仕方を身に付ければ、いつの間にか文頭から英語だけで英文が分かるようになります。そして、自然な発話ができるようになります。

■ どの国の言葉も、幾通りかの表現方法がある

前記、[do]・be・have を使った英文で、「日本語に訳すと、ほぼ同じ意味を表す」と言いました。実は、これはあくまで「意識した場合」であって、言葉通りに訳すと別の日本語になります。ここでは「主語の後ろの言葉」を、対応する日本語通りに訳してみます。

※ 日本語の表現を分かりやすくするため「アメリカでのツアー」の部分は、[_]を、[_]に、[_]のと表記します。

- ① **[do] know of the tour in the USA.**
⇒私は[_]を]知っています。
- ② **I am familiar with the tour in the USA.**
⇒私は[_と]親しい状態にいます。
- ③ **I have some info about the tour in the USA.**
⇒私は[_の]情報があります。

日本語も、このように「別の種類の言葉を使って同じような意味になる表現」がたくさんあります。

これらの赤字の言葉は「日本語の文法」では「述語」と呼ばれる「言葉の働き」をしています。日本語文法の考え方では「述語には、いろいろな言葉(名詞、動詞、形容詞、形容動詞)が使われる」となっています。つまり、「使われている言葉の種類(=品詞)」が違ってても「言葉の働きは述語である」とまとめて考えるのです。ですから、

- ①の「知っている」は、「動詞」が「述語」です。
- ②の「親しい」は、「形容詞」が「述語」です。
- ③の「情報があります」は、「～が、ある・いる」

という表現で、「～がある・いる」が「述語」です。

また、もう一つ「名詞」を「述語」に使う文もあります。

- ④ 私は海外のツアーの情報通です。

これを英語に対応させると以下の文になります。

I am a well-informed man on foreign tours.

ここでは「情報通 = a well-informed man」が人間の種類を表す名詞です。

このように、日本語では4通りの表現が「述語」として使われています。

ところで、今の解釈法でも「英語の『動詞:V』は、日本語の『述語』に対応している」となっています。

これらのことを総合して考えると、日本語でも英語でも、複数の品詞の言葉が、「述語的な判断を表す言葉」として使われていることとなります。

ですから、「主語の後ろの言葉は『動詞:Verb』である」というように、「一種類の品詞名」で英語を解釈するのは適当でなかったはずなのです。

述語が一つの品詞では、言葉は使えない

これがVSOP メソッドの提案です。この考えに従って分析していくと、英語はワンパターンになるのです。

ただし、この「話し手の判断を表す部分」を「動詞:Verb」という品詞名で呼ぶのは「英文法」に限ったことではなく、欧米での言語学的な分析は、ドイツ語もフランス語もすべて「動詞:Verb」を中心に使い方を説明するようになっています。

日本語の文法だけが、この「判断を表す部分」を「述語」と呼んで、「述語には、『名詞、動詞、形容詞、形容動詞、ある・いる』が使われる」というようになっているのです。このような欧米の文法と違う説明をしている「日本語文法」は「日本だけで通用するローカル・ルール」と思われがちですが、逆に欧米の文法が「前提でずれていた」のではないかというのが本書の提案です。

VSOP メソッドでは、この部分の「言葉の働き」に注目して、あえて新しい造語「判断語」と名付けました。なぜなら、この、[do]・be・have の3通りの言葉を操作語として、いろいろな言葉を判断の内容として使っており、さらに、その他の言葉のつながり方も、[do]・be・have の言葉のつながりを基本としているからです。

日本人が理解するためには日本語的な発想の理解法が馴染みやすいはずですが。

本書全体を通じて、この3通りの言葉のつながり方を基準に説明をしていきます。[do]・be・have が基本ロジックと考えると、あらゆる英文が、ワンパターンだと分かります。

英語の判断語

[do] + 動詞
be + 形容詞
be + 名詞
have + 名詞



訳した時に、必ずしも対応するわけではない

日本語の述語

何が、どうする。
何が、どんなだ。
何が、何だ。
何が、ある/いる。

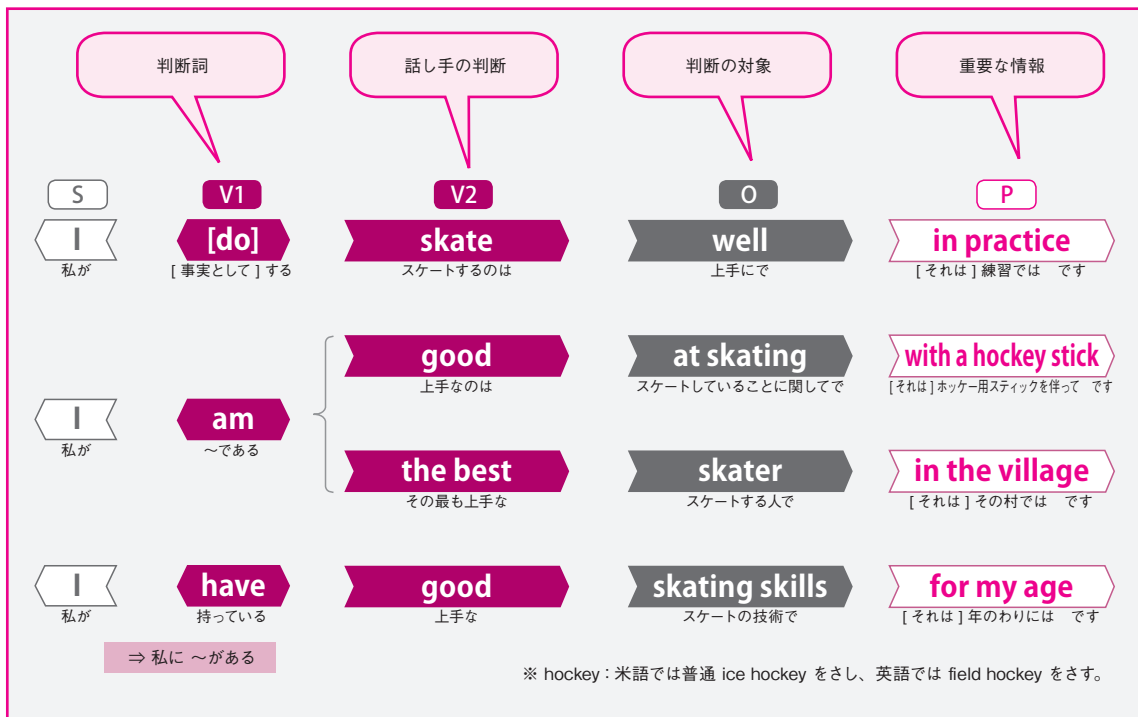
◆ ネットで見付けた同様の考え方

ネットでVSOPメソッドと似た説明をしているサイトがあります。
http://imperia.uni-due.de/imperia/md/content/japan/grammar_1.pdf
Universität Duisburg-Essen (ドイツのデュイスブルク大学) 日本語文法サイト

Probably in all languages of the world a sentence can be categorized as belonging to one of the following three basic types:

多分、世界中の全ての言葉の中で、一つの文が分類されるはずなのは、一つに所属しているように、[それは]以下に続く基本的な3種類に関して(SVOP 的訳語)

1. sentence with a verb as predicate (動詞が述語の文)
(e.g. Michael is drinking white wine. マイケルは白ワインを飲みます。)
2. sentence with a noun as predicate (名詞が述語の文)
(e.g. Michael is a student. マイケルは学生です。)
3. sentence with an adjective as predicate (形容詞が述語の文)
(e.g. Michael is eager. マイケルは熱心です。)



■ do・be・have の3つのロジック

英語の基本ロジックは、do・be・have ですから、いろいろな内容を、この3通りの表現で表せます。

【解説】

上の枠内の表現は、「私は、スケートがうまい」という意味になる表現です。

- ① [do] skate(スケートする) + well(上手に)
動作ができる + よい程度
- ② be good(上手だ) + at skating(スケートに関して)
よい状態 + 行為の内容
- ③ be a good(上手な) + skater(スケートをする人)
よい評価 + 行為をする人
- ④ have good(上手な) + skating skills(スケート技術)
よい評価 + 行為の技術

※①の「skate(動詞)」を「話し手の判断」で使っている場合、その後ろの well(上手に)が「判断の対象」になります。

“I(私が)”の後ろで言っている言葉は、みな「私の判断」です。その「判断の対象になる具体的な内容」を後ろで言うのです。

■ 主語の次に「話し手の判断」を言う

「主語の後ろ」で「話し手の判断」を言い、その後ろで「判断の対象となる内容」を言うという、英語の共通した発話ロジックを体得してください。

「動詞」とか「形容詞」とか「名詞」とか「副詞」という「品詞は『言葉の種類の名前』」であって、「文の中での『言葉の働き』」を表してはいません。

英語の各言葉の「文中での働き」を表すように名前を付けたのが

主語(S)、判断語(V)、対象語(O)、叙述語(P) という VSOP メソッドの考え方です。

■ 今までの解釈では「主語の後ろは動詞【句】

今までの解釈では「主語の後ろは動詞【句】」となっています。ですから、「be □□ と have a □□」は「動詞句」と説明されます。この「動詞句」というような「品詞による説明」では、「英語の使い方が分かった」という気分にはならないのではないのでしょうか。

Chapter 2

be □□ の判断語

Four word types of Be Verdict

[do] Verb

be Various

have Noun

be で判断語になる言葉

be 名詞

be 形容詞

be 副詞

be 前置詞句

それでは、「話し手の判断」を表すいろいろな形を具体的に見ていきます。

まず、「be いろいろな言葉 ⇒ be □□」です。この「いろいろな言葉 (□□)」というのは、「あらゆる種類の言葉」という意味です。以後、「いろいろな言葉」を“□□”と表記します。

■ be □□ の“□□”で使う言葉

① I am happy with you on this tour.

私が満足しているのはあなたと一緒に、このツアーです。

happy ⇒ 気持ちや感情、様子、状態など：形容詞

② I am a tourist from Japan.

私が [あなたは知らないでしょう] ある旅行者で、日本からです。

a tourist ⇒ 物の名前前の a/an/the：冠詞

③ I am in the mood for a trip somewhere.

私が気分の中にいるのは、ある旅行に向かって、何処かです。

in the mood ⇒ 場所、時間、状態など：前置詞句

④ I am up for a trip anytime.

私が上がった状態になっているのは、ある旅行に向かって、いつでもです。⇒いつでも旅行に行きたい状態です。

up ⇒ 位置の関係、移動や変化など：副詞

以上が、be の後ろでいろいろな言葉を使った例です。前章の be を使った例文では be aware(形容詞)だけを使いましたが、あらゆる言葉が be の後ろで「話し手の判断」として使われます。

■ 品詞で区別して考えない

説明の都合で「品詞別」に並んでいますが、ネイティブ・スピーカーが「品詞で分けて物を考えている」わけではありません。品詞に関係なく「be の後ろの言葉は、同じ働き」を表しているから使えるのです。品詞の違いは、その言葉の意味や内容が違うだけです。

一番重要なのは、この部分が「[一般] 動詞と同じ働き (話し手の判断) を表している」ことです。動詞だけでは「話し手の判断」を表すことはできません。be □□ と [do] 動詞 の判断の違いは、動詞ならば「～する」という判断で、be □□なら「□□である」という判断です。

be は、後ろの言葉 (□□) を「話し手の判断にする働き」だけで、□□に入れる言葉によって、判断の意味や内容が違ってくるだけです。

このような理解は、英語理解にとっても重要です。

訳し方



「いろいろな言葉が、同じように使える」という意味で、「分けて理解してください」という意味ではありません。

■ 品詞の違いとは

品詞は「表している内容の傾向の違い」によって分類されます。「言葉の働きの違いによって」ではありません。どんな品詞の言葉でも、be の後ろで使えば「判断の内容」を表します。

■ S is □□ の使用上の制限

S is □□ で、□□に使える言葉に品詞の制限はありませんが、S との関係で、意味不明になる組み合わせはできません。

[参考]: 今までの解釈は「言葉の使い方」によって「品詞の分類」をしますが、実際の英語では、基本英単語で使い方が決まっている語は非常に少なく、「意味と位置で、使い方を決めている」のです。

S is □□は、「S が『□□という状態』の中に入っている」という意味を表します。

上記の4種類の言葉以外にも、活用した動詞 (to do, doing, done/ -ed, a do) と、that や who、what などあらゆる言葉を S is □□で使いますが、これらは章を改めて順次説明していきます。

■ be □□

be は、後ろに「話し手の判断を表す言葉」を言う言葉で、あらゆる種類の言葉が使える便利な言葉です。

ですから、I am □□ と言えば何でも表現できます。ただ、一つ気を付けなければいけないのは、「自分が~の状態に支配されている ⇒ ~である」という **受け身的な意味** を表します。ですから、「自分から進んでやる」とか「自分が持っている」というような内容は表せません。

「自分が~を持っている ⇒ ~がある」は、have で「自分が~する」という表現は「[do] 動詞」の領分です。

◆ be + □□ = 感情、様子や状態 (形容詞)

まず、一番馴染みやすい「感情や性質、様子・状態などを表す言葉 (形容詞)」の例から始めます。

文を作る順番に、言葉を足していってみます。

①自分の状態を表すには、S is □□の□□に、「状態を表す言葉 (形容詞)」を使います。

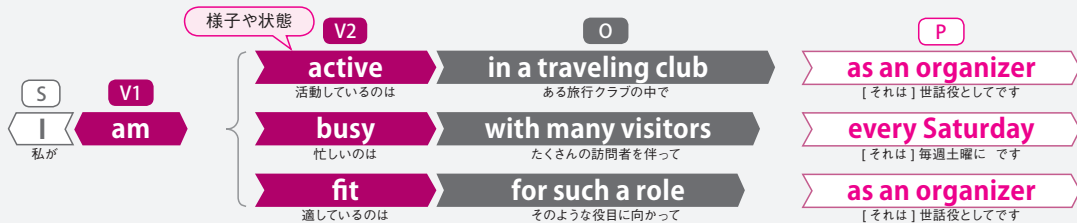
I am active. 私は活動しています。
I am busy. 私は忙しいです。
I am fit. 私は適しています。

②これだけだと、前後の文脈がないと何のことか分かりませんから、後ろのその対象を言います。

I am active in a traveling club. 旅行クラブの中にいて
I am busy with many visitors. たくさんの訪問者【と一緒に】で
I am fit for such a role. そのような役目に向かって

前後の文脈があり応答ならばこれだけでも通じます。けれども、単独に発話される文として考えると、十分ではありません。「だから何？」の部分がないからです。

① be 形容詞



③ SVO に対して「叙述 (P)」を付けます。

この「叙述 (P)」というのは TPO 情報です。

I am active in a traveling club as an organizer.

私が活動しているのはある旅行クラブで、【それは】世話役としてです。

I am busy with many visitors every Saturday.

私が忙しいのはたくさんの訪問者で、【それは】毎土曜にです。

I am fit for such a role as an organizer.

私が適しているのはそのような役目に、【それは】世話役としてです。

このように TPO 情報を言うと、聞く方は「ああ、そうですか」と、この一文だけで何が言いたいのか納得します。

これが、SVOP で文の意味を作るということです。

■ be の使い方

be (ビー) は、主語によって、現在のことなら [is, am, are]、過去のことなら [was, were] のように形を変えて使う言葉です。

【be の主語による使い分け】

●主語が単数

I am earnest. (性格が真面目です)
You are earnest.
He/She/It is earnest.

●主語が複数

We are earnest.
You are earnest.
They are earnest.

●主語が単数：I (私は)、you (あなたは)、

He(彼は) / She(彼女は) / It(それは)

I (私は)、you (あなたは) 以外の言葉が主語の時は、is を使います。その他、人名や会社名、物の名も、一つ (一人) の場合は is を使います。

●主語が複数：We(私たちは) You(あなたたちは)

They(彼らは)

主語が複数の場合は、常に are を使います。

■ be + 「気持ちや心の状態を表す言葉 (形容詞)」

英語は、主語の後ろで「話し手の判断」を言いますから、be □□で「気持ちや心の状態を表す言葉」を頻繁に使います。当然これらの言葉の種類は多くなります。この章は導入ですので、よく使う言葉を例に、英語のSVOP、つまり「先に判断を言う」という感覚を体得してください。

I am glad(私は嬉しい)のように先に「気持ち」を言い、「その対象」を後ろで言い、「それが何だ」を最後に言います。gladの例文でよく使われるのは、初対面の挨拶文として I am glad to see you.(お会いできて嬉しいです)ですが、本章までは to see you(to-不定詞)のような使い方は説明していませんからここでは使いません。しばらくは、各要素が短い表現(前置詞句)だけになります。

② be + 気持ち

<p>S</p> <p>I</p> <p>私が</p>	<p>V1</p> <p>am</p>	<p>V2</p> <p>気持ち</p>	<p>O</p>	<p>P</p>
		<p>happy</p> <p>満足しているのは</p>	<p>with my job</p> <p>私の [今の] 仕事と一緒に</p>	<p>now</p> <p>[それは] 今 です</p>
		<p>glad</p> <p>喜んでいるのは</p>	<p>of the news</p> <p>その知らせに関して</p>	<p>of a newcomer</p> <p>[それは] 新入会者に関しての です</p>
		<p>mad</p> <p>頭にきているのは</p>	<p>at him</p> <p>彼の一点に向かって</p>	<p>for his words</p> <p>[それは] 彼の言葉 (言ったこと) に です</p>

③ be + 主観的な状態 ⇒ 心情

<p>S</p> <p>I</p> <p>私が</p>	<p>V1</p> <p>am</p>	<p>V2</p>	<p>O</p>	<p>P</p>
		<p>proud</p> <p>誇りに思っているのは</p>	<p>of my job</p> <p>私の [今の] 仕事に関して</p>	<p>here in the club</p> <p>[それは] ここで、このクラブにいて</p>
		<p>sure</p> <p>確信しているのは</p>	<p>of my travel plan</p> <p>私の旅行計画に関して</p>	<p>for the tour</p> <p>[それは] そのツアーに向かって です</p>
		<p>sick</p> <p>嫌気がさしているのは</p>	<p>of the weather</p> <p>その気候に関して</p>	<p>in Japan</p> <p>[それは] 日本のです ⇒日本の天気に嫌気がさしている</p>

④ be + 客観的な状態 ⇒ 性格・性質

<p>S</p> <p>I</p> <p>私が</p>	<p>V1</p> <p>am</p>	<p>V2</p>	<p>O</p>	<p>P</p>
		<p>punctual</p> <p>時間に正確なのは</p>	<p>for appointments</p> <p>いろいろな約束に向かって</p>	<p>to the minute</p> <p>[それは] その分 (時間) に必ずするように です</p>
		<p>calm</p> <p>穏やかなのは</p>	<p>in the face</p> <p>直面している最中に</p>	<p>of any crisis</p> <p>[それは] どんな危機にでも です</p>
		<p>healthy</p> <p>健康なのは</p>	<p>in all aspects</p> <p>すべての面 (観点) において</p>	<p>of my being</p> <p>[それは] 今ある自分 [の状態] に関して です</p>

■ S is a 人の種類 (身分/職業/地位)

「自分がどんな人間か」を表す自己紹介の表現として、I am a student.(私は学生です) のような文を初めに学びます。ですから、気が付かない場合が多いのですが、このような表現は、その後ろに「それが何だ」の部分を伴って使うのが普通です。

I am a salesperson from SES Corporation.

私は、営業マンで、[それは]SES 社からのです。
【語注】* SES は本書でよく使う架空の会社名。

後ろに from SES Corporation のような具体的な情報を言わないと、聞いた方は「あなたは、何処の人?」という疑問が必ずわいてきます。このタイプの文を言う時は、その説明を後ろに言う習慣を付けましょう。

ところで、I am a salesperson の場合、いったいどの言葉が「話し手の判断」を表しているのでしょうか。

このような自己紹介の文では、「a」が一語で「話し手の判断」を表し、その判断の対象は salesperson(具体的な名詞)になります。 a/an (不定冠詞) は短い言葉ですが、非常に多くの意味を1つの単語で表します。

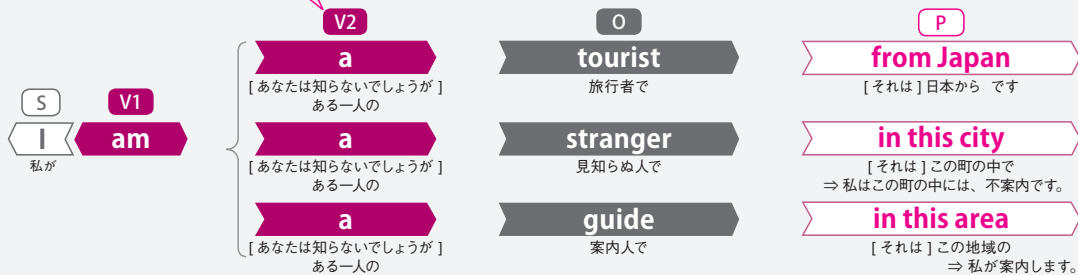
a/an の表している意味 (発話者の判断)

- ①あるまとまった具体的な物や事柄が、1つ存在している。
- ②「その人や物を相手がまだ知らない」と話し手が思っている。
- ③その物や人は、同じ仲間が一定数 (複数個) ある。

“a/an” は、このように重要な意味を表すので、短くても「話し手の判断」を表す重要な言葉です。付け忘れたり言い忘れたりしないようにしましょう。そして、判断の対象は「人の種類 (身分や職業)」になります。

① be + a 人の種類

話し手の判断



物や人の種類 (名詞) には「複数形」がある

英語では、名詞に「単数形」と「複数形」があります。

●主語が単数

I am an earnest student.
You are an earnest student.
He/She/It is an earnest student.

●主語が複数

We are all earnest students.
You are all earnest students.
They are all earnest students.

●主語が単数の場合

I, you, He/She/It など、一人の場合は、an earnest student. (性格が真面目な [一人の] 学生) を使います。

●主語が複数の場合

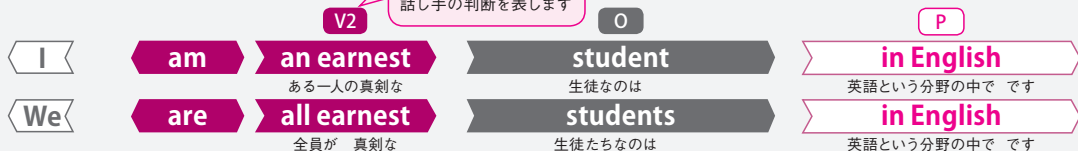
We, You, They など複数の場合は all earnest students (みんな、性格が真面目な学生たち) になります。

★人や物などの具体的な名詞を使う時、一人 (一個) のときは、a/an を付けます。どちらを付けるかは「直後の言葉の発音」で決まります。直後の言葉の発音が [a-, i-, u-, e-, o (アイウエオ = 母音)] で始まる場合は、an を付け、それ以外は、a を付けます。

※ a woman (女性) や a wolf (狼) は子音 [wu-] なので a です。

●単数形と複数形

ここに、「性質や様子を説明する言葉」を使って、話し手の判断を表します



② be + a + 補助的な判断 + 身分や職業

名詞の、固有または不可分な性質を表す言葉は名詞の前に付ける

物や人の性質や状態を言うと「話し手の判断」を表していることになる

	V2	a	good	O	
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">S</div> <div style="margin-right: 5px;">am</div> <div style="margin-left: 20px;"> <p>ある一人の</p> <p>ある一人の</p> <p>ある一人の</p> </div> </div>		a	good 良い	cook 料理人です	⇒ 料理が上手い
		a	serious 真面目な ⇒ 堅物の	teacher 教師です	⇒ まじめに教えてます
		a	hard 一生懸命な ⇒ よく働く	worker 仕事人です	⇒ 一生懸命働きます

■物や人を説明する言葉は「話し手の判断」

英語では「人や物」の「しばらく変わらない固有の性質」を表す言葉は「物や人」の**前**に付けます。

I am **a good** cook.
I am **a serious** teacher.
I am **a hard** worker.

※ work(動詞)に -er を付けると「～する人や物」を表す

good([十分に]良い)、serious(真面目な)、hard(一生懸命な)のような「性質を表す言葉」は、その「人や物が、固有に持っている」と話し手が思っているわけですから「話し手の判断」を表し「人や物(名詞)」の前に付けます。この語順は日本語と同じです。

ところが、この形の表現を直訳すると非常に奇妙な日本語になります。ですから、通常は意識します。

- ┌ 直訳 ⇒ 私は、良い料理人です。
- └ 意識 ⇒ 私は、料理が上手いです。
- ┌ 直訳 ⇒ 私は、真面目な教師です。
- └ 意識 ⇒ 私は、真面目に教えています。
- ┌ 直訳 ⇒ 私は、一生懸命な働き人です。
- └ 意識 ⇒ 私は、一生懸命働きます。

直訳と意識を比べると、「人間の性質の表し方」が、日本語と英語とで違っているのが分かります。

英語	a □□ 名詞で、名詞で表現する
日本語	動詞や形容【動】詞で表現する

これは、言葉のロジックの違いから起きます。

a serious teacher が be の後ろで使われると、I am a serious / teacher のように、am a serious が「話し手の判断」を表し、teacher を「その判断の対象」にするからです。常に「話し手の判断」が先になり、判断の対象をその後ろで言うのです。

ですから、「S is a □□ 具体的な名詞」の表現は、これだけで SVO が整っており、一定の意味ある発話になります。

このように be の直後の「性質や性格を表す言葉」は「話し手の判断」なので、日本語では「述語で訳す」と分かりやすくなるのです。日本人から見ると奇妙に感じるこれらの表現は、言語ロジックの違いによっておきます。これを理解するのが自己紹介のコツです。慣れるために、以下の文の意味を考えてみてください。

例題 be + 名詞 ⇒ 意識してみてください。

1. I am a quick/slow worker.
2. I am a quiet worker.
3. I am a good cook.
4. I am a poor speaker.
5. I am an early riser.
6. I am a late riser.
7. I am a great talker.
8. I am a big eater.
9. I am a meat eater.
10. My wife is a constant complainer.

直訳 ⇒ 意識。

1. 私は、ある速い/遅い仕事人です。 ⇒ 仕事が速い/遅い。
2. 私は、静かな働き人です。 ⇒ 静かに働きます。
3. 私は、腕の良い料理人です。 ⇒ 料理が上手い。
4. 私は、下手な話し手です。 ⇒ 話が下手だ。
5. 私は、早い起き人です。 ⇒ 早く起きます。
6. 私は、遅い起き人です。 ⇒ 寝坊です。
7. 私は、偉大な話し人です。 ⇒ 話がうまいです。
8. 私は、大きな食べる人です。 ⇒ 大食いです。
9. 私は、肉の食べる人です。 ⇒ 肉をよく食べます。
10. 妻は、継続的な不満屋です。 ⇒ いつも不満を言います。

※ cook は「料理する(動詞)」でも「料理人(名詞)」でも使う。 2015 © VSOP English Laboratory



■人や物の後ろで説明する言葉

I am a person.(私は、[ある]人です)は「抽象的で漠然として」いますが、I am a serious person(私は真面目な人です)と判断を言うと少し意味が分かります。けれども、まだ単独の発話として考えると「だから何?」と感じられます。さらに、後ろに「[それは]、こんななんですよ」と言うと、一つの発話として落ち着くことになります。

■人や物について説明するには2通りある

このように「人や物(名詞)を説明する言葉」には2通りの語順がありますので注意が必要です。

① 名詞の前に付く場合：話し手の判断

I am **an active person**. 私は活動的な/積極的な人です。

② 名詞の後ろに付く場合：叙述語

I am a person **of action**. 私は[何かの]行動をしている人です。

・前に付ける言葉は「人や物」の「固有の性質や性格」を話し手の判断として表す言葉です。

・後ろに付ける言葉は「その時の、一時的な状態」を説明する言葉です。

言葉の位置によって働きが違うので意味も違います。

【例文】前に「判断」、後に「叙述」の付いた文

I am a serious person in general.

私がある真面目な人なのは、一般的(皆と同じよう)な状態です。
⇒ 基本的に真面目な人です。

I am the hardest worker in the office.

私がある最も一生懸命な働き人なのは、その事務所の中でです。

I am a good person on the inside.

私がある良い人なのは、その内側に付いている状態です。
⇒ 内面は良い人です。

I am a passionate person with a good sense of humor.

私がある情熱的な人で、ユーモアの良い感覚も持っています。

I am a qualified person for this position.

私がある資格を授与されている人で、この位置に向かってです。
⇒ この仕事の資格を持っています。

■叙述語のいろいろな表現

I am a serious person and also a perfectionist.

私はある真面目な人で、また、完全主義者でもあります。

I am a good cook when I am in the mood.

私がある良い料理人なのは、その時、[それは]その気になった時です。

●叙述語(P)の形



■ I am a □□は後ろに説明が付く

「S is a 人や物」の表現は、多くの場合、and や who(その人は) や that(それは) を使って「その内容を説明する文」を後ろに続けるのが普通です。「S is a 人や物」だけでは十分な情報が伝えられないからです。

このような who vop で使う who を通常「関係代名詞」と呼んでいますが、「必要な情報を、後ろの文で述べる」ための言葉の使い方です。

先に判断を言い、その内容を後ろで言う英語に不可欠な表現方法なのです。次巻で詳説します。

■ 「be + 位置や場所」: ~に居る

「私は事務所 (会社) にいます」は I am in the office. となり、「私は机のところにいます」は I am at my desk. になります。これらをまとめると一つの文になります。

I am at my desk in the office.

私が机のところにいて、[それは] 私の事務所です。

S is in □□. や S is at □□. で、□□に「具体的な場所」を言うと「□□ [の中/のところ] に居る」という「話し手の判断」になります。この際、be が「居る」という意味を表すのではなく、in □□ や at □□が「居る」という意味を表します。in や at のような短い言葉を「前置詞」と呼びます。

■ 代表的な前置詞の意味

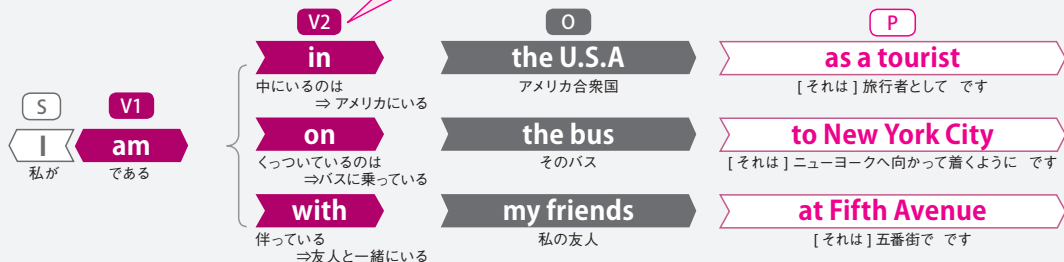
前置詞は、a/an/the の冠詞と同じように「重要な意味」を表し be の後ろで使うと「話し手の判断」を表します。

on ...	[~という事柄や事態の] 表面に付いている
in ...	[~という事柄や事態の] 中に入っている
at ...	[~という事柄や事態の] 一点に向かっている
for ...	[~という事柄や事態の] 方向に向かっている / ~のために
to ...	[~という事柄や事態に] 向かって行って、必ず着く
with ...	[~という事柄や事態に] ~と一緒にいる、~を伴っている

後ろに「具体的な物や場所」を使った場合は「判断の対象」になります。

③ be + 前置詞 + 場所

後ろに具体的な場所や人物を言うと単独で「話し手の判断」になる



※ 「バスに乗る」が on になるのは、「床」が広いからです。

■ 前置詞句の理解が英語の要

事柄の表現の仕方が日本語と違うので、前置詞を「話し手の判断」で使うには「正確な意味」と「英語のロジック」に慣れる必要があり、それなりの練習量が必要です。

英語は言葉の内容が「具体的か」「抽象的か」によって言葉の働きが変わります。前置詞の後ろの言葉が「具体的」なら、「前置詞が判断」を表し、「具体的」な言葉が「判断の対象」になります。

【例文】

1. I am on the bus to the site.
2. The boss is on a business trip to France.
3. I am in the 6th year of a 10-year contract.
4. I am in the rain without an umbrella.
5. The pain is in my shoulders and neck.
6. My wish is for a trip to Walt Disney World.
7. I'm for you.
8. I'm against you.
9. I'm with you.
10. I'm with the customers.

【和訳】

1. 私がバスに乗っているのは、その遺跡に向かって。
2. 上司が出張旅行中なのは、フランスに向かって。
3. 私が6年目にいるのは、私の10年間の契約に関して。
4. 私が雨の中にいるのは、傘を携えないです。
5. その痛みは、私の肩と首にあり。
6. 私の望みがある旅行に向いているのは、ウォルト・ディズニー・ワールドへです。
7. 私はあなたに向かってます。⇒ 賛成です / 味方です。
8. 私はあなたに対抗しています。⇒ 反対 [意見] です。
9. 私はあなたと一緒にです。⇒ 私も同感です。
10. 私はそのお客と一緒にです。⇒ 接客中です。

[注] 上記の7~10のような「S is 前置詞 [句]」だけで意味が通じる言い方は、応答用の慣用表現です。「だから何？」は、後ろに別の文で表します。

S is in □□. は「具体的な場所の中に居る」だけでなく「～の状態になっている」という意味で使います。

例えば I am in the office. は「私は事務所に居ます」という「具体的な意味」ですが、I am in office だと「職務中である ⇒ 公職についている」というような抽象的な意味になります。

I am in office as president of SES.

私が職務中なのは、社長として、[それは]SES 社です。

【語注】office は「職務」という意味が元で、「職務をする場所 ⇒ 事務所」という意味になった。president (～長) に「a」が付かないのは「一人」しかいないからです。

the (その) は、話し手が「相手は既に知っている」と思える「人／物／事柄」に付けます。

全体で状態を表す
「話し手の判断」

③ be + 前置詞 + 状態



■前置詞句が「抽象的な判断」⇒ 後ろに対象語 (O)

このような「S is 前置詞句」の表現は「話し手の判断」だけですから、後ろに O-P を続けて意味を完成させます。

■「前置詞＋抽象名詞」は「話し手の判断」になる

前置詞の後ろで「抽象的な名詞」を使うと「まとめて一つの『話し手の判断』」を表します。

I am in a hurry. 私は急いでいる。
I am in trouble. 私はもめている。
I am in doubt. 私は疑っている。

さらに、

I am at ease. 私は安心している。
I am at a loss. 私は途方にくれている。
I am on duty. 私は義務に付いている。⇒勤務中です。

などの表現になります。

「前置詞＋名詞」を「前置詞句」と呼びますが、前置詞の後ろの名詞が「具体的か」「抽象的か」によって言葉の働きは違います。

【例文】

- I am in charge of phone calls to customers.
- I am in regular contact with my family by phone.
- I am at a conference on global climate change this week.
- I am of the same opinion as you on this issue.
- I am in the process of contacting the customer.
- I am at ease in dealing with big businesses.
- I am on duty for emergency calls tonight.
- I was in time for the conference on the environment.

【和訳】

- 私が、担当責任をしているのは電話かけで、[それは]お客様にです。
- 私は、定期的に連絡を取っているのは、私の家族と、電話です。
- 私が会議に参加中なのは、世界的な気候変動に付いての、今週はです。
- 私が同じ意見に支配されているのは、あなたに関して、この問題に付いてです。⇒あなたと同意見です。
- 私が経過の中にいる(最中な)のは、連絡していることに関して、そのお客様に。
- 私が気楽になれるのは取り扱っていることに関して、大きな仕事を伴っていて。⇒大きな仕事も気楽にやれます。
- 私が義務に付いているのは、緊急電話に向かって、今晚はです。
- 私が間に合ったのはその会議に、環境に付いてのです。

【注】「前置詞＋名詞」で「一つの働き」をしますので、「前置詞句」と呼びます。前置詞の前が「言葉のまとまり(文節)の切れ目」になります。ただし、「be + 前置詞＋抽象的な名詞」の場合は、「be + 前置詞」で「話し手の判断」になります。

■ be + 位置の変化を表す

前置詞と同じように「位置の変化を表す短い言葉」に、up、out、offなどの「副詞」と呼ばれる言葉があります。

- out** … […の]外に出て[いく]
- off** … […の]表面から離れて[いく]
- up** … […の]上へ、のぼって[いく]
- down** … […の]下へ、下りて[いく]
- away** … その場から遠ざかって[いく]
- along** … […を]沿って[いる]

「前置詞」と「副詞」の区別

in, on, alongなどはどちらの使い方もするので「使い方」によって「副詞」と「前置詞」に呼び分けています。分類の基準は「直後に名詞が有るか無いか」です。

- ・直後が名詞の場合 「前置詞」の使い方
- ・直後が名詞でない場合 「副詞」の使い方

be の後ろで「どのような言葉」が使われても「□□の状態である」という「話し手の判断」を表しています。

③ be + 前置詞 + 状態



【前置詞でも副詞でも使うことのある言葉】

- in** … […の] [まっ最] 中にある
- on** … […の] 表面にくっついている
- by** … […の] 影響力のあるもの [かたわら] にいる

【前置詞の使い方しかない言葉】

- to** … ~の到着点に向かって行って着く
- for** … ~の方向に向かって行く
- at** … …の一点にいる [ある] / 一点を突つく
- with** … ~と一緒にいる、~を伴って
- of** … ~の、~ [の全体] に関して

これらの言葉は、「抽象的で漠然としている」ので、be □□ で使うと意識しないと分かりにくくなります。それは「変化の具体的な内容」を後ろの対象語が表しているため、対象語によって日本語の意味が大きく変わるからです。また、このような「位置の関係の変化」を表す言葉が「状態の変化」を表すこともあり、文脈によっていろいろな意味になります。

前置詞 [句] と同じように『抽象的な変化や状態』を判断として先に言い、後ろの言葉の内容によって意味ははっきりしていく」という発話法を身に付けましょう。

【例文】

1. **I am out of [my] town** until the end of this week.
2. **I am off of work** at 7 p.m. at the Shimbashi branch.
3. **I am up for a drink** at a yakitori bar.
4. **I am away from home** on business.
5. **I am along with my friend** at a yakitori bar.
6. **I am back to my hotel** with my friend.
7. **I am down with a headache**.

【和訳】

1. 私が外にいるのは私の町に関して、[それは] 今週末までです。⇒ 今週末まで、[出張で] 居ません。
2. 私が離れるのは仕事に関して、[それは] 午後7時、新橋支店です。⇒ 午後7時で、仕事は終わりです。
3. 私が上がっているのは一杯飲みに向かって、[それは] 焼鳥屋です。⇒ 焼鳥屋で一杯引っかけたいです。
4. 私が離れているのは自宅から、[それは] 仕事です。⇒ 仕事で、家を離れています。
5. 私が沿っているのは友人と一緒に、[それは] 焼鳥屋です。⇒ 焼鳥屋で、友人と一緒にです。
6. 私が戻ってくるのはホテルに向かって、[それは] 友人とです。⇒ 友人と、ホテルに戻ってきています。
7. 私が落ちているのは頭痛で。⇒ 頭痛で今ダウンしています。

※「副詞」の詳細な使い方は、「英語順! しやべれる英文法 (あざ出版 2015) © VSOP English Laboratory.

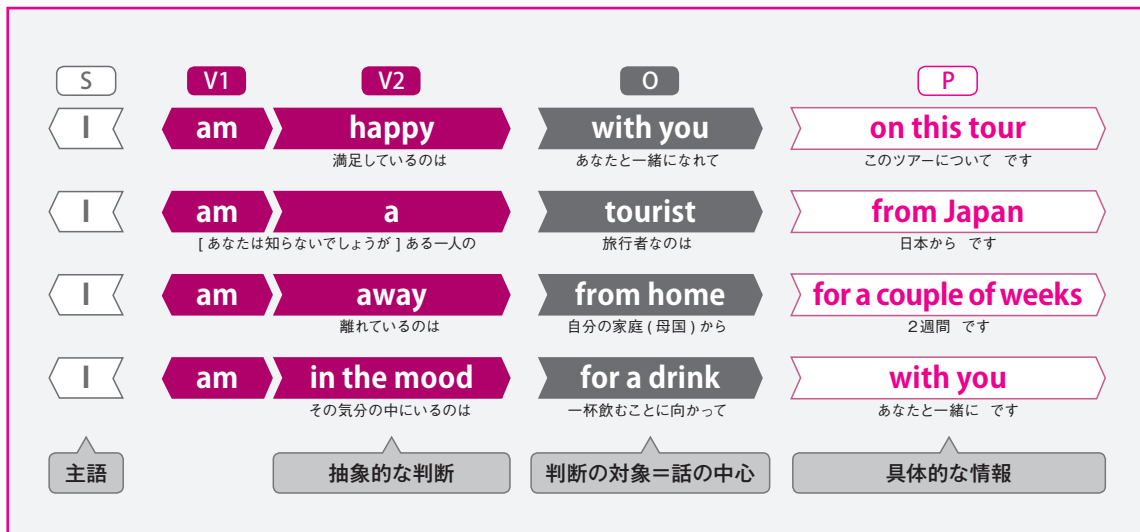
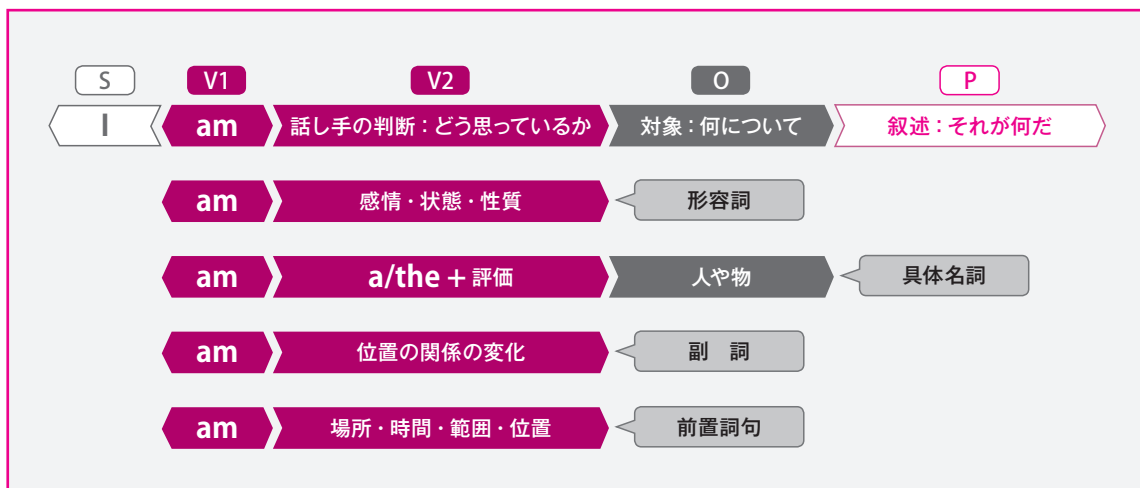
■ be □□ は「話し手の判断」

beの「後ろの言葉」は「話し手の判断」を表します。判断語は「抽象的な内容」の言葉が使われます。例えば、This is a pen(これはある一つのペンです)ならば、a(ある一つの)が話し手の判断になります。penが判断の対象になります。そして、その後ろに、to you(君に上げる)とかfor line drawing(線画を描くのに向かっている ⇒ 線画用の)などの具体的な情報を付け足します。さらに、詳しく情報を言う場合はthat is good for line drawing(それが適しているのは線画を描くのに)のように一つの文で表します。(P176 参照)

■ 英語式の発話とは

英語式の発話とは、beの後ろで「抽象的な判断」を言い、その後ろに「具体的な内容の対象」を言います。そして、その後ろで「それが何だ」という説明をするようにすることなのです。

ここで、今まで説明してきたbe □□の□□に、名詞・形容詞・副詞・前置詞句を使っている文を復習しておきます。どれも、同じ働きになっていることを確認してください。



2-11 S was □□ : be の過去形

過去の事実、時を表す言葉

■過去の「状態」を表す : be の過去形

be を使う文で「～だった」という「過去の事実」を表すには、be の過去形 (was, were) を使います。

I am □□, You are □□, He/She is □□ は今の状態を表しますが、「～だった」という過去の状態を表す時は、I **was** □□, You **were** □□, He/She **was** □□ のように、**was** や **were** を使います。判断詞 (do-be-have) は「現在」か「過去」を表します。

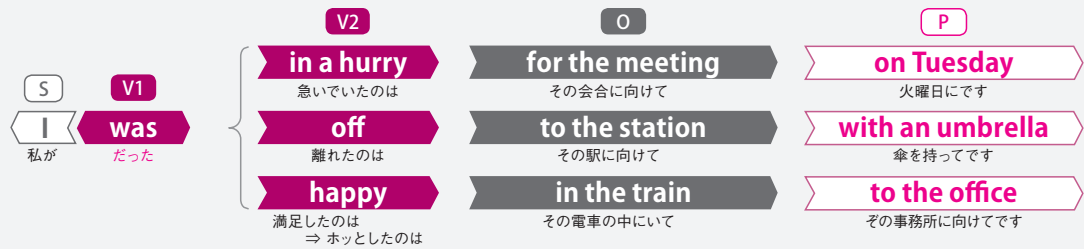
否定文、疑問文とその応答などは、**was** や **were** を、am, is, are と同じように操作して使います。

■ was を使った過去の例文

- I **was a member** of a rock band in college.
- I **was late** for the company presentation on that day.
- I **was at** the station around 9 a.m. that morning.
- I **was off** to a bad start in my job search.
- I **was sad** with the rejection letter from the company.

私が一員だったのは、ロックバンドので、[それは] 学生時代にです。
 私が遅れたのは、その会社説明会にて、[それは] その [特別な] 日にです。
 私が駅にいたのは、9 時頃で、[それは] その朝にです。
 私が離れたのは、悪い始まりに向かって、[それは] 就職活動です。
 私が悲しかったのは、不採用通知を伴って、[それは] その会社からのです。

③ was □□



■過去を表す言葉

過去の状態を言う場合は、「それが、いつのことだったか (時)」を言うことが多くなります。

【語例】過去の時を表す言葉

- the other day…先日
- on the day…[特定の] その日に yesterday…昨日
- the day before yesterday…一昨日
- three days ago…3 日前 two weeks ago…2 週間前
- three months ago…3 ヶ月前
- four years ago…4 年前
- last night / week / month / … 昨夜 / 先週 [月]
- last year…去年 last century…前世紀

これらの言葉の代わりに、話題になっている時を指して then(その時) や、at that time(その時) が使われることもあります。

どちらにしても、これらの言葉は会話の中で使われるので「発話されている時」を基準にしています。事実を伝える文で使うと基準が分からないので「あいまい」になります。はっきりさせるためには「特定の日時」や「期間」で表すことになります。

- for three days…3 日間 in March…3 月に
- on July 2[nd]…7 月 2 日に
- in the spring of 2007…2007 年の春に
- through the holidays…その休暇の間ずっと



[注] 「過去形」を使った場合、「今は～ではない」という意味を同時に表しています。

Chapter 3

基本動詞を使った判断語

基本動詞は

4つの使い方がある

1. 具体的な行為を
表す使い方 ×2

2. 変化を表す
補助的な使い方 ×2

Four types of usage of the verb “get”.

Type ① Intransitive Action Verb

I **got to** the gate of the site **at** 10 a.m.

Type ② Intransitive Linking Verb

I **got in trouble** on the way **to** the site.

Type ③ Transitive Action Verb

I **got** an umbrella **at** the street stall.*

Type ④ Transitive Linking Verb

I **got** the umbrella **open**.

* 露店商

■動作や行為を表すには動詞を使う

be は「～である」という「静止している状態」を表現します。それに対して「～になる」や「～にする」のような「変化や行為」は [一般] 動詞を使って表します。

■「自動詞」と「他動詞」の使い方の違い

get, make, take, give のような基本動詞は、「主語が、自分で動作や変化」を表す「自動詞の使い方」と「主語が、他の人や物、事柄を動かして、行為や変化をさせる」ことを表す「他動詞の使い方」とがあります。

共に、後ろの言葉が「具体的な行為」か「抽象的な変化の内容」かによって日本語の意味が変わってきます。

このように考えると「動詞は 2×2 で、4パターンの使い方がある」ことになるのですが、どの場合も SVOP で意味を作ることは同じです。

基本動詞は、上記のどの使い方もします。「動詞によって使い方が決まる」のではなく「使い方が予め決まっています (SVOP)」、それに動詞を当てはめて使います。get で、その様子を説明します。

■ get が「いろいろな意味」になる理由

be □□ は、ほとんど get □□ で使えます。get □□ は、「□□ [の状態] を手に入れる」という意味で、後ろの □□ の言葉によって「いろいろな語訳」になります。get が「～になる」という補助的な意味でも使うからです。

・ get の自動詞の使い方 Type ①

① get : 「具体的な場所」を「手に入れる」⇒ ~する

I get to the office around nine every morning.

私が手に入れているのは、事務所に着くこと、およそ9時に、毎朝です。

I get on the bus at the nearest bus stop.

私が手に入れているのは、バスに乗ること、最寄りのバス停です。

I get in a taxi when it rains.

私が手に入れているのは、タクシーの中にいること、その時は、雨です。

get の後ろで「具体的な場所」を言えば、get は「～の場所を手に入れる」となり「～する」という具体的な行為を表します。「具体的な場所」が get の対象語 (O) です。

- get to my office** ⇒ 事務所に着く
- get on the bus** ⇒ バスに乗る
- get in a taxi** ⇒ タクシーに乗る

② get を「～になる」: 補助的な自動詞の使い方 Type ②

□□ に抽象的な内容を使うと、get は「□□になる」とか「□□する」という補助的な語訳になります。□□ で使える言葉に品詞の制限はありません。

I get busy with work around ten.

私が忙しくなるのは、仕事を伴って、およそ10時にです。

I get out for lunch at twelve.

私が外に出るのは、昼食に向かって、12時 [ちょうど] にです。

I get in contact with customers in the afternoon.

私が接触状態になるのは、顧客を伴って、午後 にです。⇒ 顧客と連絡を取る

I got a chance for a trip to the USA.

私が機会を得たのは、ある旅行に向かって、アメリカの中 のです。

この場合、「get □□」は「全体で一つの判断」を表すので、get は「補助的な使い方 [Mid]」で、さらに後ろの「前置詞句になっている具体的な言葉」が対象語 (O) になり、「主語 (自分) がやる具体的な内容」を表します。

・自動詞の使い方は、S is □□ がもともとなっている

I am in contact with the customer now.
I got in contact with the customer last week.

私がなっているのは、連絡している状態の中にいるように、その顧客と一緒に、今です。⇒ 私はその顧客と連絡している。
私が手に入れたのは、連絡している状態の中にいるように、その顧客と一緒に先週です。⇒ 私はその顧客と連絡できた。

自動詞の使い方では、get の後ろのどの言葉も「主語の説明」になっており、S is □□ が元になります。

自動詞の使い方: ① get の後ろが具体的な場所



自動詞の使い方: ② get の後ろが抽象的な内容



* get □□ は、「変化」を表しますから、判断詞は [do] になります。[do] が V1、get が V2 で、□□ は V3 になり判断の内容を表します。
* get a chance は、have a chance が元になっている表現です。